

館林市埋蔵文化財発堀調査報告書 第27集

大大袋袋 4城 遺跡 遺跡

— 発堀調査報告書 —

1994

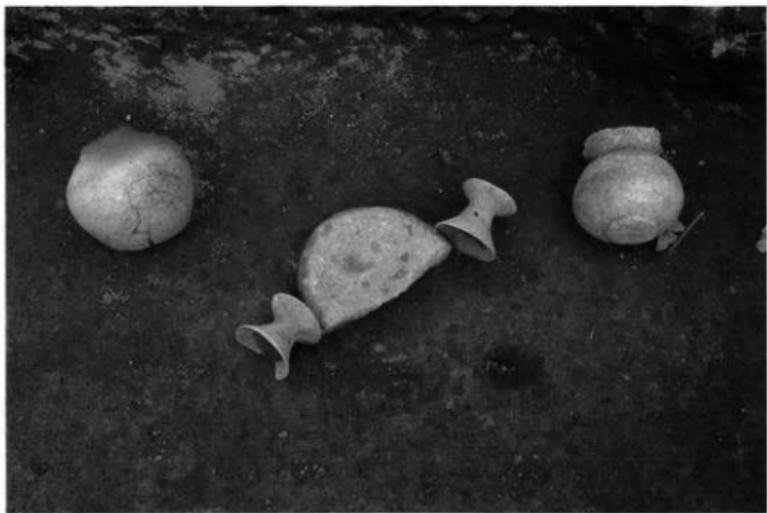
館林市教育委員会

大袋4遺跡  
大袋城遺跡

— 発掘調査報告書 —

1994

館林市教育委員会



大袋4遺跡2号住居址遺物出土



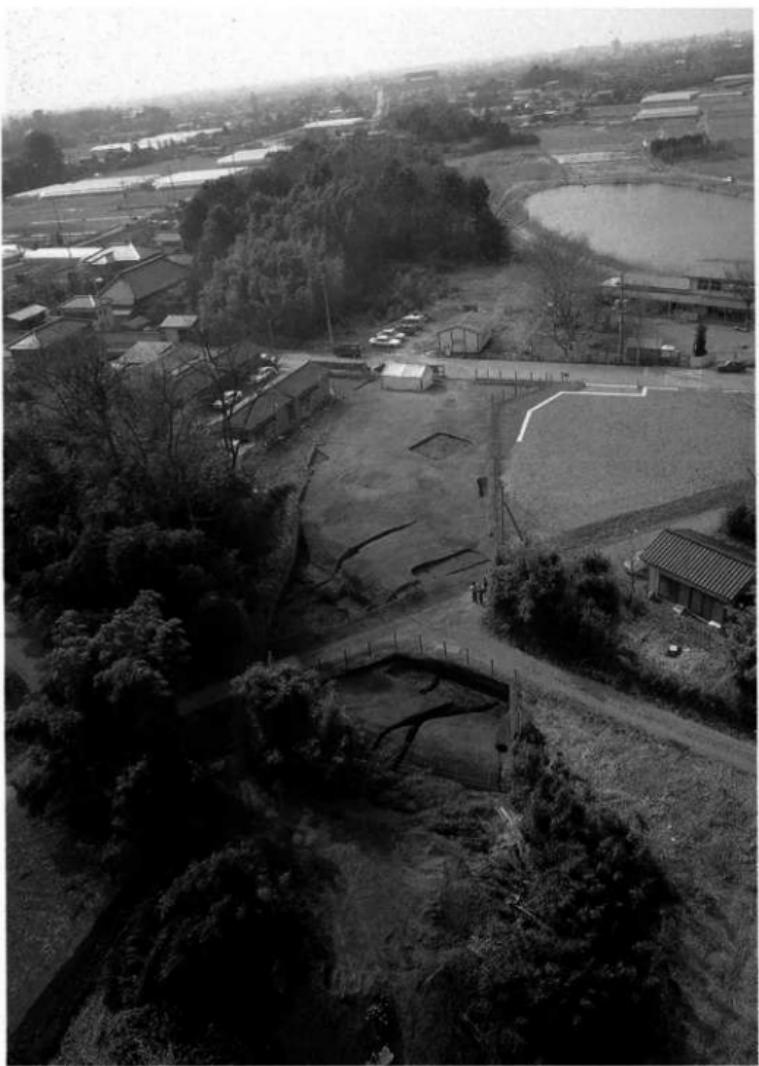
大袋城遺跡5号住居址と土壙断面



大袋 4 遺跡



大袋 4 遺跡



大袋城遺跡

## 序

県道板倉沢谷館林線は、館林市街地から城沼の北岸を通って隣の板倉町へ接する要路でした。しかし、モータリゼーションの発達と時間短縮という時代の流れは、従来のこの道路ではその要求を満たしきれないものとしていました。また、本市の東西をつなぐ幹線道路の整備、路線の開拓はこれからの館林市の町づくりにはなくてはならないものとなっています。こうした背景の下に、平成6年度より城沼の南を通る路線の建設が始まることとなり、この工事に先立って路線内に推定されている埋蔵文化財の調査が行われることになりました。

今回は、大袋4遺跡、大袋城遺跡の2ヶ所の調査を実施し、平成5年度に発掘調査、6年度に整理作業を行いました。調査範囲は、遺跡全体からすればほんの僅かな部分でしたが、両遺跡ともに古墳時代中期の住居址が確認されたほか、大袋城遺跡では城の堀、土塁なども調査されました。こうして私達の目の前に現れた過去の足跡の一端は、新たに追加された歴史の1頁として館林市の歴史の深さを再確認せるものでした。そして今年度、私達の祖先が残したこのかけがえのない歴史を大袋4遺跡、大袋城遺跡の発掘調査報告書として発刊の運びとなりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県土木部及び館林土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、(旧)群馬県埋蔵文化財調査事業団、地元関係者等に種々お世話になりました。報告書を刊行するにあたり、これら関係者の皆様には衷心より感謝の意を表しますとともに、本報告書が郷土を知る手掛かりのひとつになれば幸いです。

平成7年3月

館林市教育委員会  
教育長 高瀬 利一

## 例　　言

1. 本書は県道板倉沢谷館林線の道路改良工事に伴い事前調査された「大袋4遺跡」及び「大袋城遺跡」両遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大袋4遺跡は群馬県館林市楠町字下志柄地内に、大袋城遺跡は同館林市花山町字大袋地内に所在する。
3. 本発掘調査は、群馬県土木部と館林市との委託契約により館林市教育委員会が実施した。その組織は次の通りである。

教　育　長　高瀬　利一

教　育　次　長　田村　粹男（平成6年3月31日まで）　関口　久男（平成6年4月1日より）

文化振興課長　江森　勝一（平成6年3月31日まで）　田沼　俊彦（平成6年4月1日より）

文化財係長　早川　紀正

主　　任　川島　孝男（担当者）

4. 調査期間及び担当者

(1) 発掘調査

調　査　期　間　大袋4遺跡　平成5年12月20日～平成6年2月17日

　　　　　　大袋城遺跡　平成6年2月10日～平成6年3月21日

調査及び事務　川島孝男

調査補助員　寺内景子

臨時職員　青木正江　荒井重信　石井悦雄　石井光子　石川栄吉　石川有紀

井上明治　尾川邦代　荻野貴子　奥山裕り　希代つや　小林浩子

坂田岩吉　佐々木美智子　佐藤七平　砂賀香織　中條里香　寺内義正

戸叶真千子　布目雄一郎　野口信　野口文恵　橋本治美　林正行

早野茂　松本末吉　持田恵理　森田茂　山岸正明　吉田洋

(2) 整　理

整　理　期　間　平成6年9月26日～平成7年3月20日

整理及び事務　川島孝男

調査補助員　寺内景子

臨時職員　石井悦雄　石川栄吉　石川有紀　尾川邦代　奥山裕り　川島範子

小林浩子　坂田岩吉　寺内義正　寺崎佳寿子　戸叶真千子　野口信

林正行　早野茂

5. 調査に伴う諸経費は、群馬県よりの委託金による。

6. 遺構、遺物等の実測の一部は株式会社シン技術コンサルに、科学分析は株式会社古環境研究所にそれぞれ委託した。
7. 本書の取りまとめ、執筆は川島が行った。
8. 調査による出土遺物、調査記録、資料は館林市教育委員会が保管している。
9. 調査ならび本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関の御指導を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

# 目 次

口 絡

序

例 言

目 次

挿図目次

写真目次

## 第一章 館林市の環境

位置と地形 .....	1
館林市内の遺跡 .....	3

## 第二章 調査にいたる経過と調査方法 .....

5

## 第三章 調査の概要

第一節 大袋4遺跡 .....	7
-----------------	---

立地と環境 .....	7
-------------	---

調査の概要 .....	8
-------------	---

1号住居址 .....	11
-------------	----

2号住居址 .....	18
-------------	----

掘立柱状遺構 .....	25
--------------	----

溝 .....	26
---------	----

第二節 大袋城遺跡 .....	31
-----------------	----

立地と環境 .....	31
-------------	----

調査の概要 .....	32
-------------	----

3号住居址 .....	35
-------------	----

4号住居址 .....	41
-------------	----

5号住居址 .....	45
-------------	----

土塁 .....	52
----------	----

堀 .....	53
---------	----

溝 .....	52
---------	----

井戸 .....	64
----------	----

第三節 自然科学分析 .....	70
------------------	----

1. 大袋城遺跡のテフラ分析 .....	70
----------------------	----

2. 大袋4遺跡・大袋城遺跡出土炭化材の樹種同定 .....	73
--------------------------------	----

## 参考文献 .....

76

## 抄録 .....

77

## 挿図目次

第1図	館林市の地形	2
第2図	住居址の確認された遺跡と城館址	4
第3図	県道板倉羽谷館林線路線計画図	6
第4図	大袋4遺跡調査地位置図	7
第5図	大袋4遺跡調査区全体図	9
第6図	1号住居址平面図	12
第7図	" 遺物分布図	13
第8図	" 出土遺物(1)(2)	14・15
第9図	2号住居址平面図	19
第10図	" 遺物分布図	20
第11図	" 出土遺物	22
第12図	掘立柱状造構平面図	25
第13図	溝出土遺物	28
第14図	2区溝平面図	29
第15図	大袋城遺跡調査地位置図	31
第16図	大袋城遺跡調査区全体図	34
第17図	3号住居址平面図	37
第18図	" 遺物分布図	38
第19図	" 出土遺物	39
第20図	4号住居址平面図	42
第21図	" 遺物分布図	42
第22図	" 出土遺物	43
第23図	5号住居址平面図	46
第24図	" 遺物分布図	47
第25図	" 出土遺物(1)(2)	49・50
第26図	土壙現況図	55
第27図	堀平面図	56
第28図	土壙及び堀合成図	57
第29図	土壙及び堀土層断面図	58
第30図	堀土層断面図	59
第31図	堀出土遺物	60
第32図	2区溝・堀平面図	63
第33図	井戸出土遺物	65
第34図	大袋城遺跡略測図	67

## 写真目次

写真 1 大袋4遺跡遠景	8	写真 45 大袋城遺跡遠景	32
写真 2 大袋4遺跡調査前	8	写真 46 大袋城遺跡調査前	32
写真 3 重機による掘削	10	写真 47 重機による掘削	32
写真 4 作業風景	10	写真 48 作業風景	33
写真 5 1号住居址全景	11	写真 49 3号住居址全景	35
写真 6 " 遺物出土	11	写真 50 " 遺物出土	35
写真 7 " 遺物分布	11	写真 51 " 遺物分布	35
写真 8~15 " 出土遺物	16	写真 52 " 全景	36
写真 16 "	17	写真 53~56 " 出土遺物	40
写真 17 2号住居址全景	18	写真 57 4号住居址遺物分布	41
写真 18 "	18	写真 58 " 遺物出土	41
写真 19 "	18	写真 59~62 " 出土遺物	43
写真 20 "	21	写真 63 " 全景	44
写真 21 "	21	写真 64 5号住居址全景	45
写真 22 "	21	写真 65 " 遺物出土	45
写真 23~29 "	23	写真 66 " 遺物分布	45
写真 30 "	24	写真 67 " 土層断面	48
写真 31 挖立柱状遺構全景	25	写真 68 5号住居址と土塁	48
写真 32 2区全景	26	写真 69~72 " 出土遺物	50
写真 33 溝	26	写真 73~75 " 出土遺物	51
写真 34 溝出土遺物	27	写真 76 " 全景	51
写真 35 2区溝全景	27	写真 77 土塁断面	52
写真 36 大袋4遺跡遠景	28	写真 78 土塁現況	52
写真 37 " 2号住居址遺物出土	30	写真 79 土塁調査状況	53
写真 38 " 2号住居址遺物出土	30	写真 80 土塁	53
写真 39 " 1号住居址土層断面	30	写真 81 堀現況	53
写真 40 " 2号住居址遺物取上げ	30	写真 82 堀遠景	54
写真 41 " 1号住居址完掘状態	30	写真 83 堀断面(東側)	54
写真 42 " 2号住居址及び2号溝	30	写真 84 堀断面(西側)	54
写真 43 " 1号住居址出土遺物	30	写真 85~94 堀出土遺物	61
写真 44 " 2号住居址出土遺物	30	写真 95 堀全景	62

写真 96	溝	62
写真 97～108	井戸出土遺物	66
写真 109	大袋城遺跡遠景	68
写真 110	大袋城遺跡調査区遠景	68
写真 111	" 堀	69
写真 112	" 調査区遠景	69
写真 113	" 3号住居址土層断面	69
写真 114	" 土壁	69
写真 115	" 焙作業風景	69
写真 116	" 3号住居址出土遺物	69
写真 117	" 4号住居址出土遺物	69
写真 118	" 5号住居址出土遺物	69
写真 119	炭化材顕微鏡写真	75

## 第一章 館林市の環境

### 位置と地形

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置する総面積60km<sup>2</sup>余り、人口約77,500人を擁する東毛と呼ばれる当地方の中核都市の一つである。市域は東西15km、南北8kmと東西に長く、北は渡良瀬川を境に栃木県に、東は隣接する邑楽郡板倉町東方の渡良瀬川遊水地を境に茨城県に、南はやはり隣接する邑楽郡明和村南方の利根川を境に埼玉県に接し、東南北のいずれも近距離のうちに利根・渡良瀬という二大河川が東流し、前記三県に囲まれている。また、県都前橋市まで約50km、首都東京までは東武鉄道伊勢崎線で浅草まで約65km、東北自動車道では館林インターから都心まで80km余りと、首都圏との結び付きも強い。

次に地形的に本市を概観すると、洪積地（洪積台地・内陸古砂丘）と沖積地（自然堤防・低湿地・池沼・河川等）に大別され、県内でも標高の最も低い地域に属している。

洪積地は、本市中央部を東西の帶状に延びる「邑楽・館林台地」と呼ばれる台地となっており、西方の太田市高林から大泉町、邑楽町を経て館林市に達し、更に東の板倉町へと続いている。本市における標高はおよそ18m～25mである。その構成を見ると、河川の堆積物とされる礫、砂、シルトの互層の上に、中部及び上部ロームの二層が堆積し、形成時期は下末吉海進時に遡るとされている。

また、この「邑楽・館林台地」北側の縁に沿って、埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）が走っている。幅約100m、洪積台地からは5m前後の比高をもち、大泉町古海から本市高根へ至る約13kmにわたっている。本市の最高点はこの埋没河畔砂丘上にある。形成時期は、やはり下末吉海進時からその後の海退時に遡るといわれる。

そして、この台地を取り囲むように、利根川及び渡良瀬川の氾濫原である標高15m前後の冲積地が広がっている。この冲積地は、北部の渡良瀬川沿岸地域と南部の利根川沿岸地域に分けられ、この冲積地には広大な低湿地が広がり、かつては大小の池沼が点在していた。また、この低湿地の中には蛇行する旧河道が残り、これに沿って自然堤防が発達している。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面との比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。これは埼玉県の北東部を中心を持つといわれる関東造盆地運動の影響によるものと考えられている。

洪積台地はまた、沖積低地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。その中でも市内最大の谷は鶴生田川から城沼へかけてのもので、台地を南北に二分し、更に深い谷が枝分かれするように延びている。こうした洪積台地を開析する谷には、ほかに茂林寺沼、蛇沼等の池沼を作るものなど大小様々なものがあり、本市景観上の特徴の一つになっている。

第11圖 銀座の市街地



## 館林市内の遺跡

館林市内における遺跡数は、昭和58年から63年にかけて実施された市内遺跡詳細分布調査（「館林市の遺跡」）によれば、144ヶ所が推定されている。これは、現地踏査により遺跡としての可能性を推定したものであるが、内訳を見ると、旧石器時代－3、縄文時代－13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代－0、古墳時代から平安時代を含むもの－96（うち縄文時代の遺物散布の見られるもの23）、古墳－17（推定を含み延べ25基）、中世生産址－1、中世城館址－12（伝承地を含む）、近世城館址－2となっている。

「館林市の遺跡」をもとにした遺跡の分布は、本市中央部の台地に接する池沼、低湿地との密接な関わりを示している。この分布は、沼、低湿地を核にした幾つかのブロックに分けることができ、ブロックごとに遺跡の時代別傾向に違いが見られる。

先ず本市東部の城沼周辺には20以上の遺跡が推定され、一つの濃い遺跡分布を見せている。時代別の傾向では、城沼北岸、南岸の東部と西部の三つに分けることができ、北岸では、市の指定史跡となっている山王山古墳を含む善長寺付近遺跡など古墳時代、平安時代を中心とした遺跡の分布が見られる。南岸東部では、富士山古墳、古墳時代の住居址の確認された大袋城遺跡などの古墳時代が中心となっている。また南岸の西部では昭和55、56年度に調査され縄文時代の住居址が確認された大袋Ⅱ遺跡をはじめ縄文時代の遺跡が分布している。

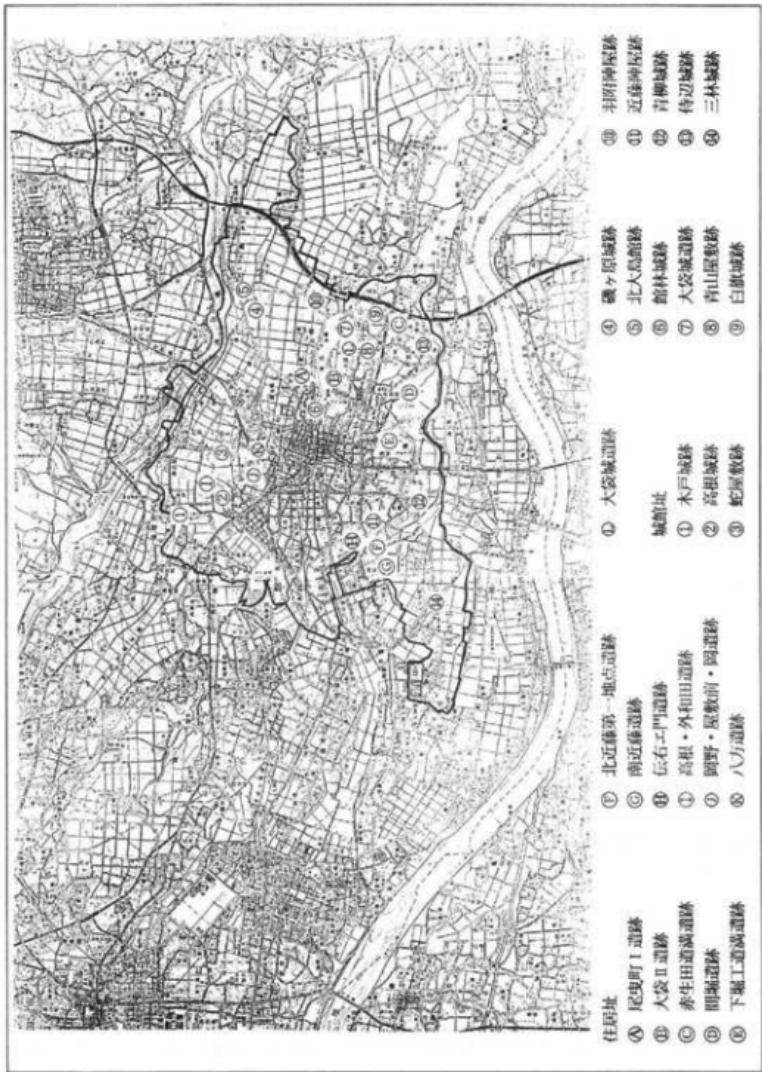
次に南部の蛇沼周辺では、昭和57年度の調査で縄文時代の住居址が確認された間堀遺跡をはじめ6ヶ所の遺跡があり、縄文時代の遺跡が分布している。

この蛇沼を伴う開析谷の西には茂林寺沼が広がっており、これを取り巻くように10カ所に遺跡が推定されている。時代別の傾向では、沼の東側で大原道東遺跡ほか縄文時代の遺跡が中心となり、西側では前通遺跡、中山東遺跡など平安時代の遺跡が分布している。

また、南西部の近藤沼では、近藤沼へ続く北方の開析谷も含めた周辺で10ヶ所の遺跡が分布している。沼の周辺では古墳時代の住居址の確認された南近藤遺跡、北近藤第一地点遺跡など古墳時代の遺跡が中心となり、北方の開析谷周辺では伝右エ門遺跡をはじめ縄文時代、古墳時代の遺跡となっている。

このほか北部の旧河道沿いでは、平安時代の遺物を含む遺跡が多いが、全体的な傾向は捉え難い。また、南東部の洪積台地を刻む数本の開析谷周辺では、古墳を含め20を超える遺跡が推定されているが、多くが平安時代の遺跡である。

これらのことから窺える遺跡分布上の特色として、時代別には縄文時代の後・晚期から弥生時代、古墳時代初頭へかけての遺跡が少なく、立地では縄文時代、古墳時代の遺跡が低地に面する台地斜面、台上地など台地の縁辺に多く分布し、奈良時代、平安時代になると遺跡数も増加し台地内部、自然堤防上にも分布が広がって行く傾向にある。



第2図 住居址の確認された遺跡と城館址

## 第二章 発掘調査にいたる経過と調査方法

### 調査経過

県道板倉羽谷館林線は、館林市の中心部から城沼の北岸台地上を通り、城沼の東から東北自動車道を越え更に東の板倉町に至る幹線道路の一つである。しかし、近年の市街地化の進展、交通量の増加などに対応するため、道路網整備の一環としてこの板倉羽谷館林線の改良工事が計画された。今回の計画では市内の東西を結ぶ基幹道路の一つとして、城沼の南にある古城沼の南から東方へ迂回して、城沼の東で従来の道路へと整備されることとなった。

群馬県教育委員会では、同県土木部の計画した路線内に下志柄遺跡、大袋4遺跡、大袋城遺跡の3ヶ所の周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、同部との協議により試掘調査を実施することとした。試掘範囲は、現地踏査により路線内上記3遺跡地内のはか下志柄遺跡と大袋4遺跡の中間台地上も対象となった。試掘調査は平成5年1月と、その後の用地買収の進捗等により平成5年9月の2度行われ、1月の調査で大袋城遺跡に、9月の調査では大袋4遺跡と前述の中間台地上に遺構が確認された。この結果により路線内の2ヶ所で発掘調査を要すると判断され、同年の10月に館林土木事務所より群馬県教育委員会へ調査依頼がなされ、その後の協議により館林市が今回の調査を実施することとなった。翌年11月館林市長と群馬県知事との間で埋蔵文化財調査委託契約が結ばれ、平成4年12月より翌平成5年3月まで館林市教育委員会が調査を実施した。

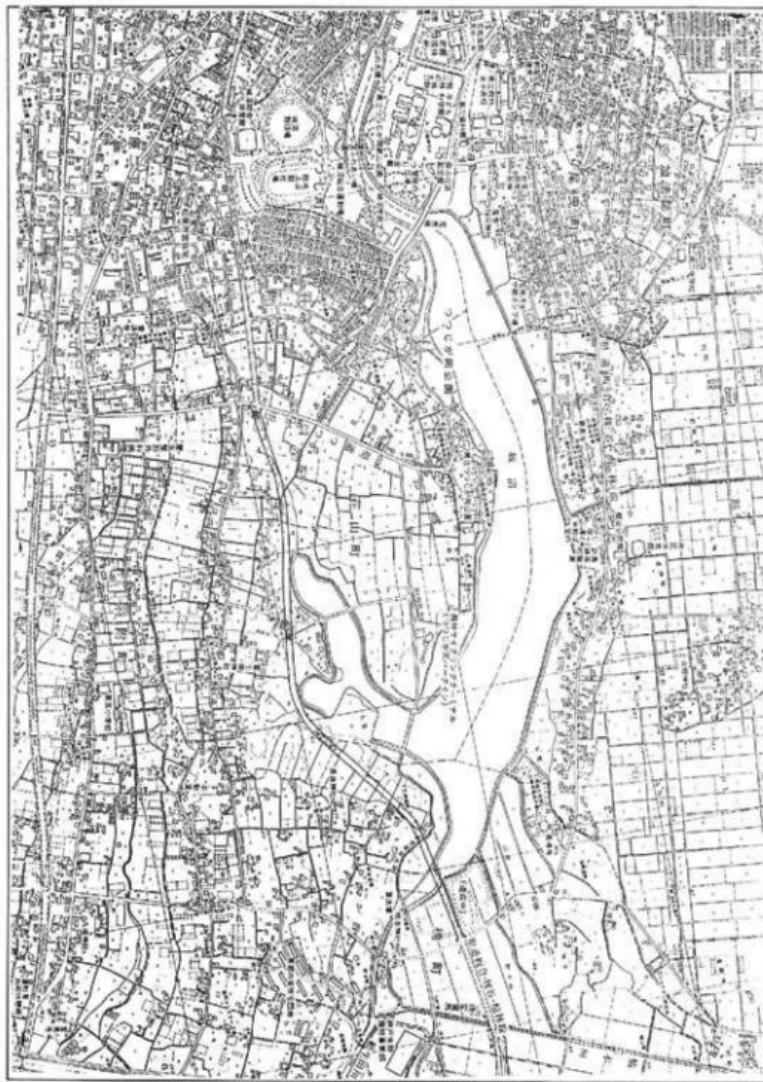
### 調査方法

試掘調査は、計画路線内の埋蔵文化財包蔵地部分及び上述の中間台地上について行い、路線に沿って任意の試掘溝を2~3本設定した。

本調査は、試掘調査の結果遺構の存在が予想された総ての部分について行い、大袋4遺跡より始め逐次大袋城遺跡へと移動した。表土の除去には重機を使用し、排土置場は路線内の調査区外側を充てた。表土は大袋4遺跡、大袋城遺跡とも全体的に浅く、大袋4遺跡では耕作土の直下20cm程度でローム層に達し、大袋城遺跡も宅地及び駐車場となっていた調査区の表土下20cm弱でローム層となっていた。したがって大袋城遺跡の堀及び土塁と想定された部分以外は総てローム層上面まで重機により表土除去を行った。

また測量については、大袋4遺跡の調査区全体図、大袋城遺跡では土塁と思われる盛土や堀を思わせる窪みがあったため、調査前に現況測量を行うこととし、航空測量を行った。その後も調査の進捗状況に合わせて、遺構、調査区全体の測量には航空測量を行った。

第3図 岐阜板倉松前林緑路線計画図



### 第三章 調査の概要

#### 第一節 大袋4遺跡

##### 立地と環境

大袋4遺跡は、城沼及びその南の古城沼の二つの低湿地を核とした周辺台地上に分布する遺跡の一つである。城沼は市内に点在する池沼の中でも大きなもの一つで、本市市街地の東側に東西の帶状に細長く延び、邑楽・館林台地を開析する谷の中でも、本市中央部を東流する鶴生田川からこの城沼へかけての谷は市内最大のものである。この城沼の南東に、南西方から北の城沼へ延びる支谷があり、その中に形成された低湿地帯が古城沼である。古城沼は、現在東西600m、幅約100m程の東西に細長い沼で、周囲は洪積台地に閉まれ東端で城沼へ流れ込んでいる。この谷は更に西へ300m程上流まで刻まれ湿地から水田となっている。大袋4遺跡はこの古城沼を西に見下ろす台地上に位置している。

周辺の遺跡、特にこの城沼の南側一帯には、縄文時代から中世へ至る遺跡が点在している。過去の調査結果及び踏査、立地条件等により遺跡を推定した遺跡詳細分布調査報告書「館林市の遺跡」を基にその分布を見ると、この大袋4遺跡に近接して北に縄文時代の下志柄遺跡、東には古墳時代以降の町谷1遺跡、町谷2遺跡、平安時代の町谷3遺跡、古墳では下志柄古墳、町谷1号古墳、町谷2号古墳、中世城館址として白旗城跡、西にはとともに平安時代の大袋3遺跡、大袋5遺跡、更に西に縄文時代の大袋I遺跡、大袋II遺跡、古墳では富士山古墳、中世城館址の青山屋敷跡、今回大袋4遺跡とともに調査を行った大袋城遺跡などがある。これらのうち調査経緯の



第4図 大袋4遺跡調査地位置図

あるのは昭和55・56年度に調査された大袋Ⅱ遺跡、昭和56・57年度の大袋Ⅰ遺跡、平成4年度の町谷1遺跡、大袋城遺跡の4遺跡があり、大袋Ⅱ遺跡では縄文時代早期の炉穴群が3基、縄文時代前期の竪穴住居址が7軒、縄文時代中期の竪穴住居址が3軒、大袋城遺跡では古墳時代前期と推定された竪穴住居址1軒などが確認されている。調査経緯のない遺跡が多く未確定な要素が多いが、これら城沼を核とした遺跡にはその時代別分布に地域的な傾向が見られ、「館林市の遺跡」や、過去の調査から城沼は南岸の東部と西部、それと北岸の三地域に分けられる。この大袋4遺跡を含めた城沼の南岸東部では古墳時代を中心とした遺跡が多く、南岸西部では縄文時代が中心となり、対岸の城沼北岸では館林市指定史跡山王山古墳を含め古墳時代以降の遺跡が分布している。

大袋4遺跡の広がる台地は、標高20m余りのほぼ平坦な耕作地となっており、西側の古城沼周囲の低湿地との比高差は約4m、低地側から見た台地面はほぼ水平で耕作地造成のための削平を受けた観があった。この中で道路工事施工部分となり今回調査対象となったのは、台地が古城沼へ落ち込む台地の西側の縁に沿った部分で、幅15m、長さ90mの帯状の範囲であった。周辺は雜木林や畑の広がるのどかな農村地域であった。

### 調査の概要

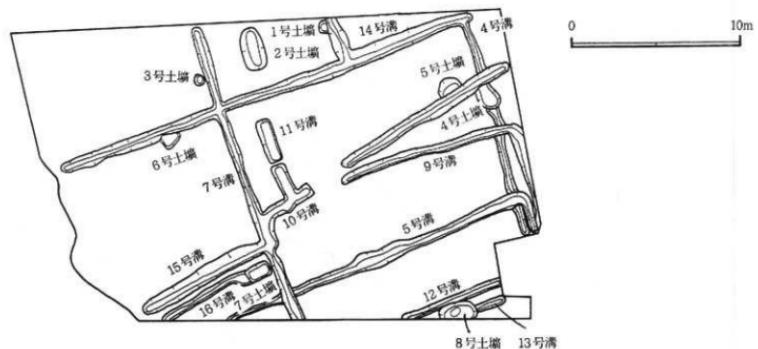
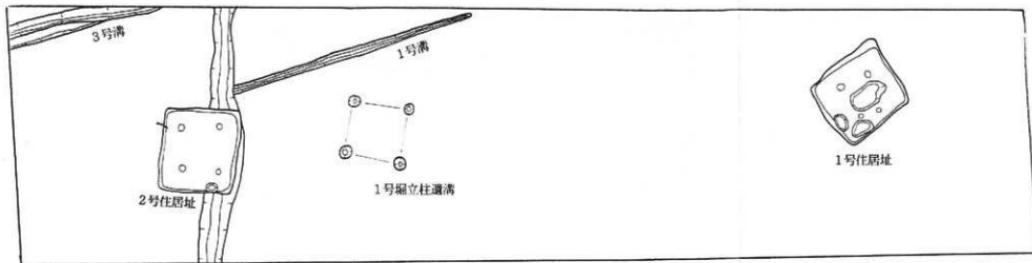
調査の範囲は、古城沼東岸台地上の西の縁を南西から北東へ走る道路建設予定地の試掘により遺構の推定された台地上の帯状の部分であった。調査区は、西に古城沼、北には城沼を望み、



写真1 大袋4遺跡遠景



写真2 大袋4遺跡調査前



第5图 大袋4遺跡調査区全体図

南と北には古城沼へ向う小規模な谷があり、西側の古城沼へ落ち込む斜面は多少の起伏をもった雜木林となっていた。東側は調査区も含めてほぼ平坦な畑地が広がり、試掘の結果、耕作土の直下がローム層となっている部分が多く見られ、耕作地造成のためと思われるある程度の削平を受けていることが予想された。

調査区は、調査対象地の西半部中央を横切る道路によって二つに分け、道路の東側を1区、西側を2区とした。

調査の結果確認された遺構は、1区では東半部及び西半部の中央付近に竪穴住居址を各々一軒、西半部の住居址の東側に近接して掘立柱状遺構を1基、このほか1区西半部に溝を3本であった。住居址は調査区東半部のものを1号住居址、西半部のものを2号住居址、溝



写真3 重機による掘削



写真4 作業風景

は2号住居址を切っていたものを2溝、2溝から北へ延びていたものを1溝、1区西端の道路下から調査区の北壁に沿って鉤の手になっていたものを3溝とした。住居址は、出土した土器からいずれも古墳時代中期前半に属するものと考えられる。また、1号、2号住居址とともに床面には炭化材が確認され焼失住居であったことが推定された。掘立柱状遺構については、時代を比定し得る遺物の出土がなかったため年代は不明であるが、2号住居址に近接していたことからこの住居址との何らかの関連も考えられる。2区からは、耕作地を区画したものとも思われる溝が確認された。1区の溝も含めて確認された16本の溝からは、いずれも時代を比定できる遺物等の出土はなかった。

### 1号住居址

本住居址は、1区東半部中央付近の北壁寄りに確認され、確認時点では幅20cm程のトレンチャーのものと思われる数本の溝状の擾乱によって縞状に切られていた。平面形はほぼ東西南北に四辺のある方形の竪穴住居址で、四辺の長さには多少のばらつきがあった。各辺の長さは東辺4.3m、西辺4.8m、南辺4.1m、北辺3.9mと南北方向が若干長く、北辺と東辺が詰まつたややいびつな方形となっていた。

確認できた壁高は、南側が比較的高く残存し最高を測った南東隅が50cm弱、低かった北辺中央で30cm足らずであった。壁溝は検出されなかった。

柱穴は、住居内に4ヶ所小穴が確認された。位置は、概ね住居の外形に対応するものの、南側の二つはともに南壁から1.5m、東西壁からは約1.0mと規則的であったのに対し、北側の二つは南側のものに較べ不揃いでいた。深さは北側の二つが浅く30cmに満たず、南西のものが40cm、南東のものが最深で70cmであった。直径はいずれも25cmから30cmであった。位置からこれらを主柱穴と考えたい。



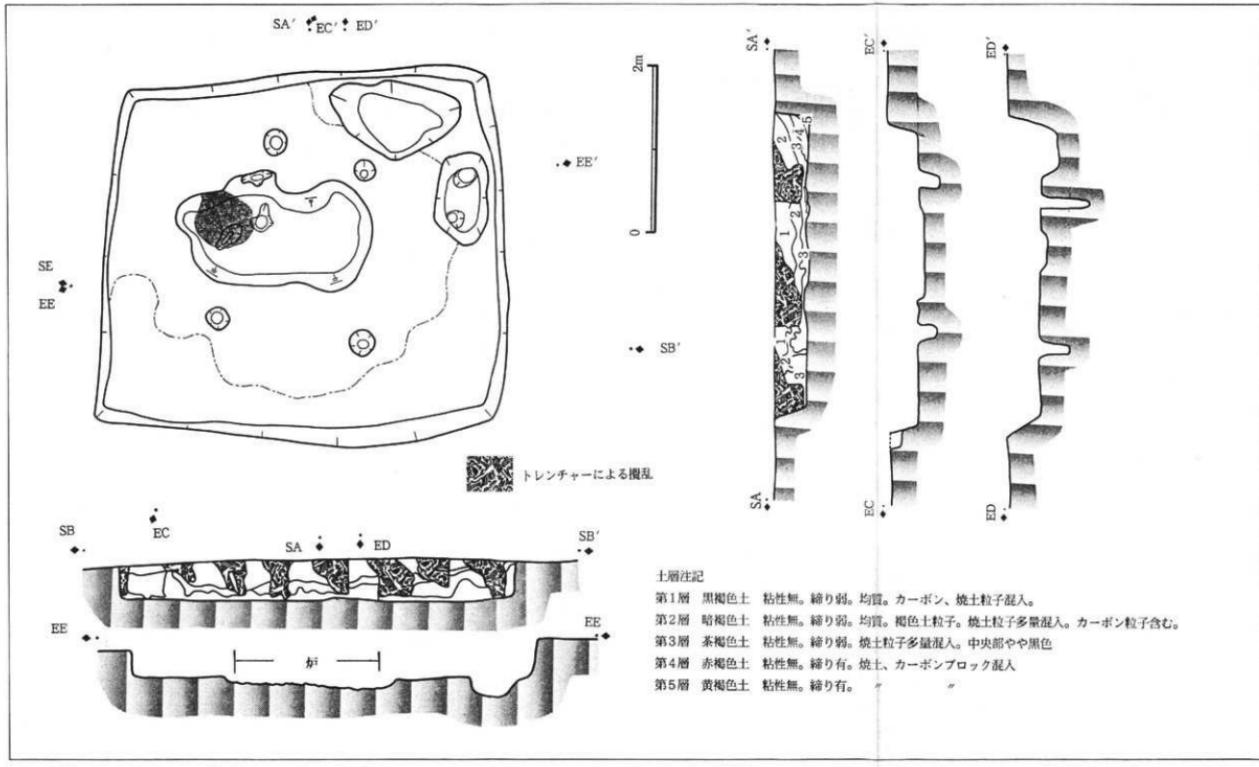
写真5 1号住居址全景



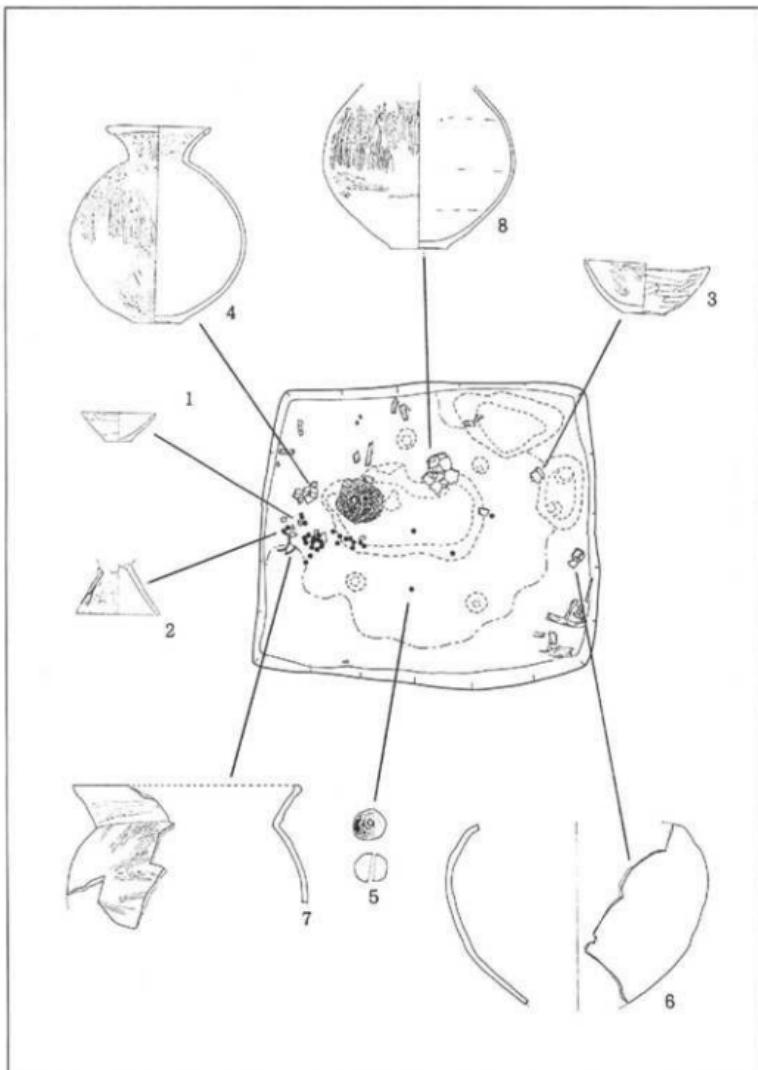
写真6 1号住居址遺物出土



写真7 1号住居址遺物分布



第6図 1号住居址平面図



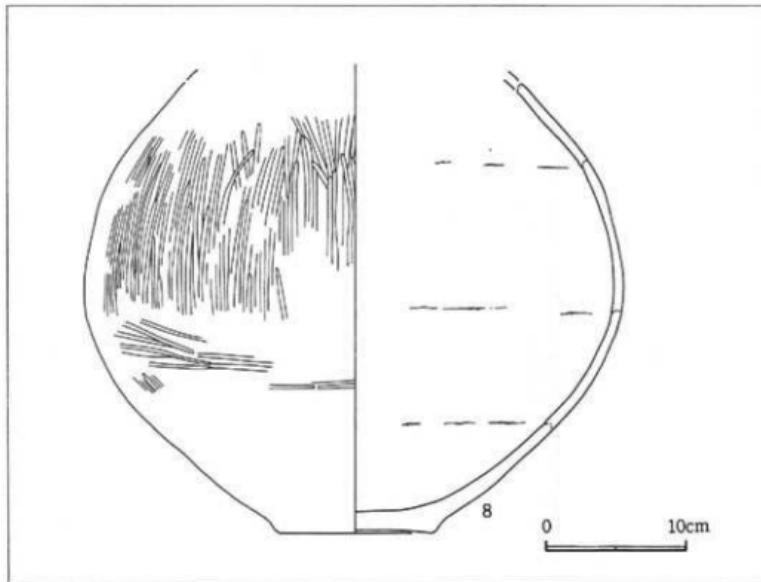
第7図 1号住居址遺物分布図

貯蔵穴については、住居内に2基の土坑が検出され、南東隅に1基とこれに近接して南壁際に1基である。南東隅のものは長径1.5m、短径90cm、深さは床面下26cmで南北方向に長い西側の膨らんだ楕円形であった。南壁際のものは長径1.1m、短径60cm、深さは床面下18cmで南壁際に沿って東西方向に長い長円形であった。またこの土坑の底には東端と西端に小穴があり、東端のものは直径30cm弱、深さは土坑底面下16cm、西端のものは直径20cm、深さは6cmであった。いずれの土坑からも遺物等の出土ではなく、貯蔵穴等これら床下土坑の性格付けは判然としない。

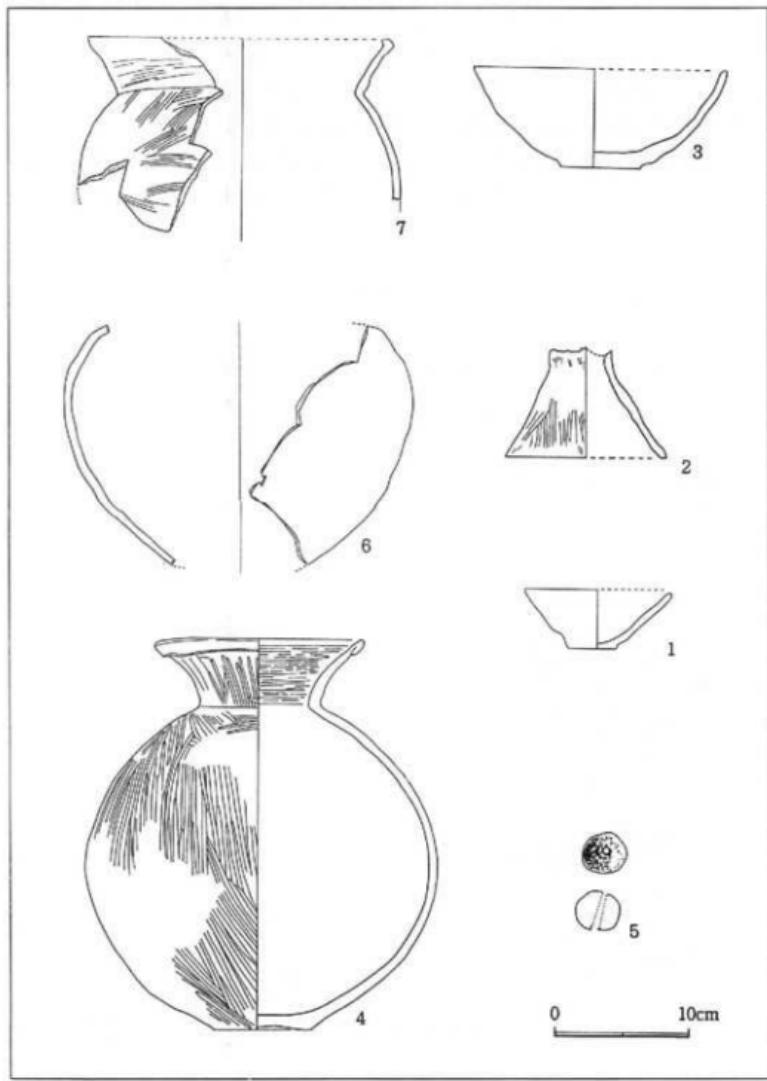
炉は住居址中央やや北東寄りに位置し、南北に長い長円形を呈していた。形状は床面を掘り窪めたもので、確認できた規模は長径2.3m、短径1.3m、深さは平均10cm程度であった。炉内の北側部分には直径70cm程度で円形に焼土が堆積していた。

床面は炉の周囲1.0m程の範囲から南東隅にかけてよく締まっており、直上の層には多量の炭化物や焼土が含まれていた。これらの炭化物は当住居が焼失住居であったことを窺わせるものであった。

出土遺物には、甕、壺、土玉等があった。



第8図 1号住居址出土遺物（1）



第8図 1号住居址出土遺物（2）



写真8 1号住居址出土遺物



写真9 1号住居址出土遺物



写真10 1号住居址出土遺物



写真11 1号住居址出土遺物



写真12 1号住居址出土遺物



写真13 1号住居址出土遺物



写真14 1号住居址出土遺物



写真15 1号住居址出土遺物

1号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口径×器高×底径)	残存	摘要
1	土師器 壺	11.1 × 4.3 × 4.1	完形	小ぶりの底部から直線的に立ち上がり、口唇部は平らに面取りされている。
2	土師器 脚部	- × - × 12.6		大型で「ハ」の字に聞く。外面に縦の刷毛目。接地部は平らに面取りされている。
3	土師器 碗	19.0 × 7.5 × 6.6	完形	体部は内縁気味に立ち上がり、外面には横の箝削り、内面は縦の箝磨き。
4	土師器 壺	16.0 × 29.2 × 7.2	完形	胴部は均整のとれた丸味を持ち、外反する口縁の端部は折り返しとなっている。胴部は縦の箝磨き。
5	土師器 土玉	3.4 × 3.1 × -	完形	比較的整った球形をなす。中心部に穿孔あり。
6	土師器 甕	- × - × -	胴部の一部	横の刷毛目の上に箝磨きあり。胴部下位に膨らみを持つ。
7	土師器 甕	- × - × -	口縁から胴の一部	頸部は「く」の字に外傾し、直線的に立ち上がる。口唇部内外面に横撫で。頸部内外面箝削り。胴部外面は刷毛目の上に箝削り。
8	土師器 壺	- × - × 10.8	胴部下 半1/2	胴部は均整のとれた丸味を持ち、胴部上半に縦の箝磨き、下半は横の箝磨き、内面の一部に輪積みの痕跡あり。



写真16 1号住居址全景

## 2号住居址

本住居址は、1区西半部のほぼ中央に確認され、調査区に直交するように横切る2溝によって東半部を切られていた。平面形はほぼ東西南北に対角線のある幾分隅丸の方形の竪穴住居址であった。四辺の長さは、南西辺及び北東辺がともに4.9m、南東辺が4.2m、北西辺は4.5mであった。対面する北西辺と南東辺では長さに若干の違いがあるが、これは北西辺が2溝によって切られていたためで、本来その差は小さく、南西辺及び北東辺の若干長い整った方形であったと思われる。

確認できた壁高は、東隅付近が比較的高く70cm弱、低かった北隅の50cmを除きほぼ60cm内外であった。壁溝は検出されなかった。

柱穴は、住居内に4ヶ所の小穴が確認された。位置は、住居の外形と相似形をなすように配されており、各隅からの距離は、南隅のものが1.5mであったほかは1.1mから1.2mであった。深さは最深の西隅のものが50cm、浅いものは北隅で30cm強で、直径は30cmから40cm弱であった。位置からこれらの小穴を主柱穴と考えたい。



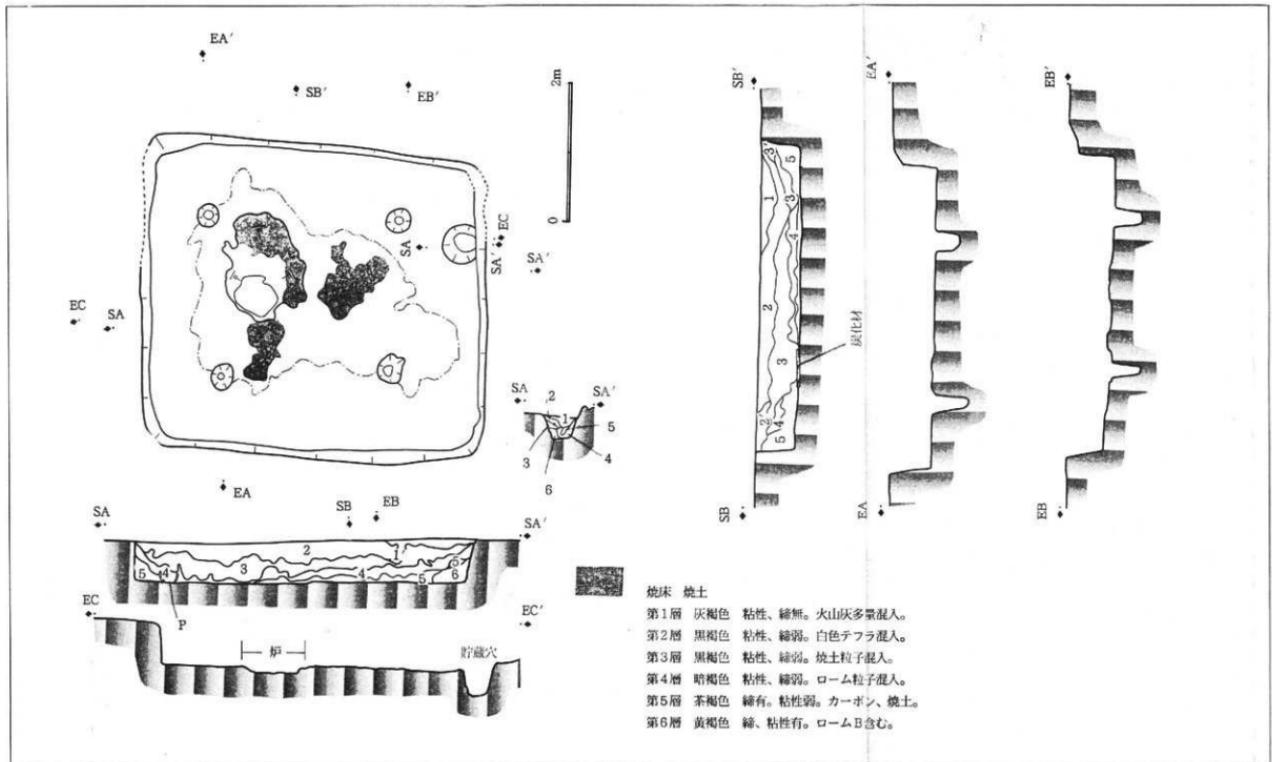
写真17 2号住居址全景



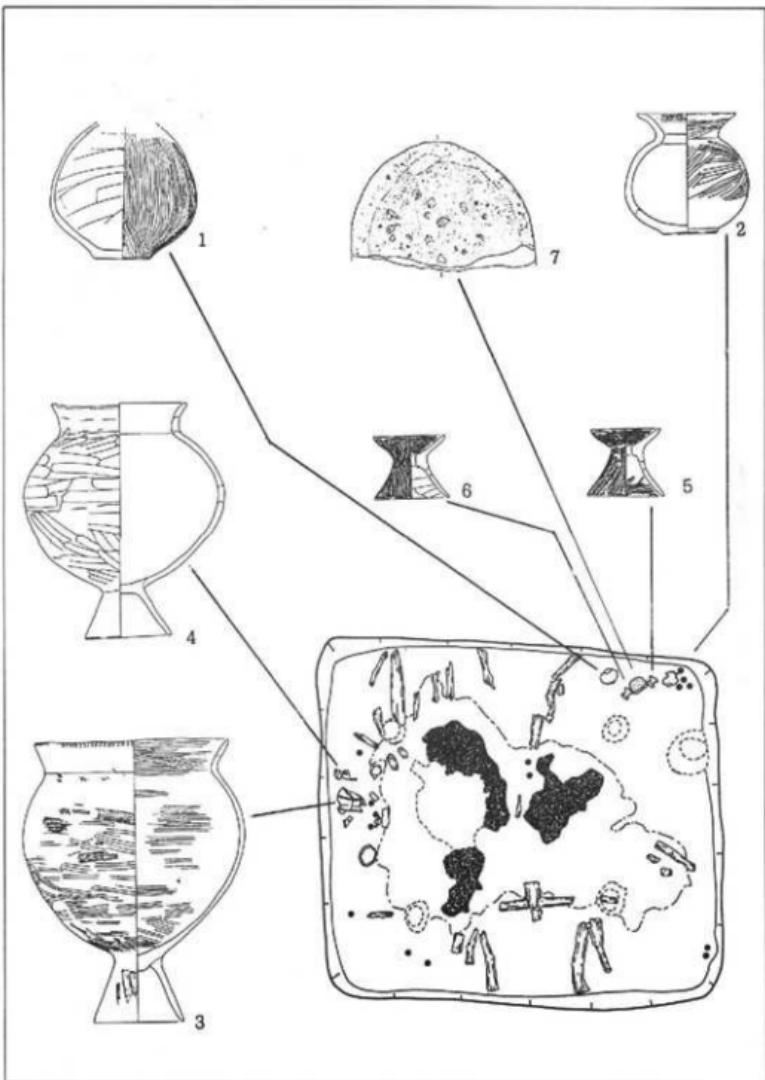
写真18 2号住居址遺物出土



写真19 2号住居址遺物出土



第9図 2号居住址平面図



第10図 2号住居址遺物分布図

貯蔵穴については、東隅やや南寄りの壁の直下に確認された。大きさは長径が50cm、短径が40cmで、深さは35cm弱であった。覆土からは遺物等は検出されなかつた。

炉は、住居の中央部、北及び西隅の柱穴の中央内側に確認された。床面を掘り廻めたもので、確認できた規模は長径1.0m、短径80cm、深さは13cmであった。また床面から炉底までは、北から東へかけて縁取るように二段の傾斜となっていた。

床面は東隅の柱穴付近を除いて柱穴に囲まれた範囲に縮まった部分が広がり、部分的に焼土の堆積が見られた。また、床には一部炭化材が残り、床面直上に炭化物や焼土を含む層があった。当住居址も1号住居址同様焼失住居であつたと思われる。

出土遺物としては、北東辺の東隅に、石皿を真中においてその左右に器台が2点、更にその外側に甕が2点、完形に近い状態で出土した。出土の状況は、石皿の両側で器台にのっていた甕が落ちて、そのまま時をおかず埋まり現在にいたった印象さえあった。このほか、北西辺中央付近に台付甕2点ほかが出土した。



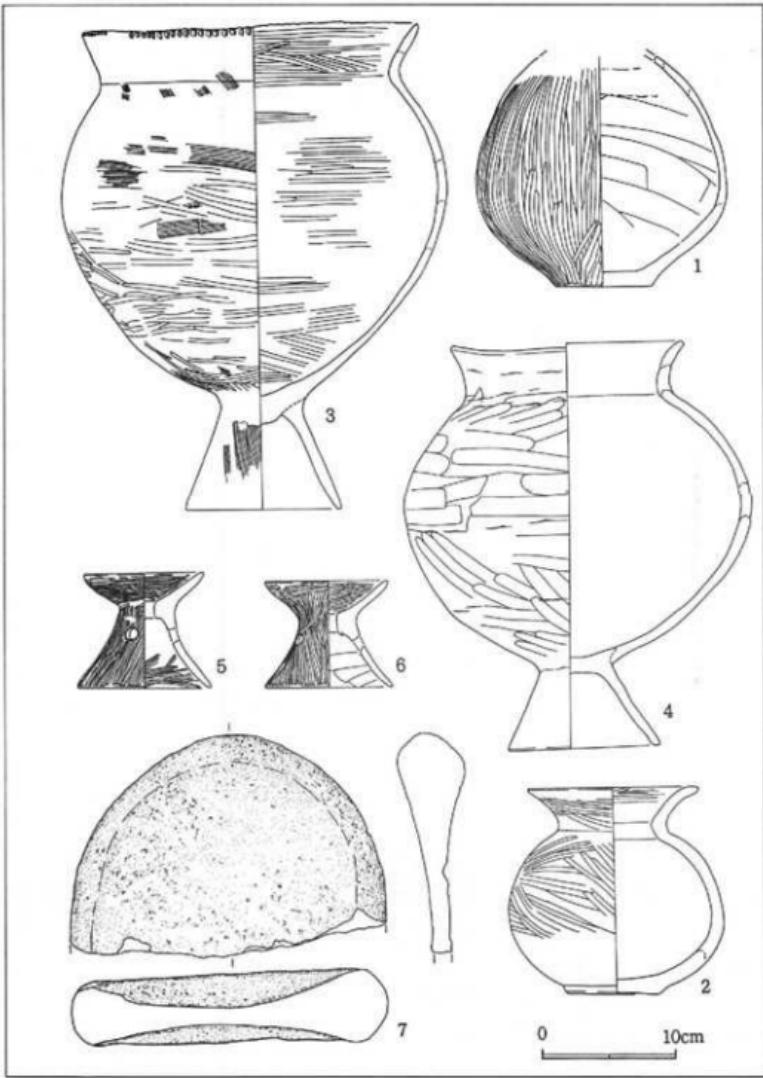
写真20 2号住居址遺物分布



写真21 2号住居址遺物分布



写真22 2号住居址土層断面



第11図 2号住居址出土遺物

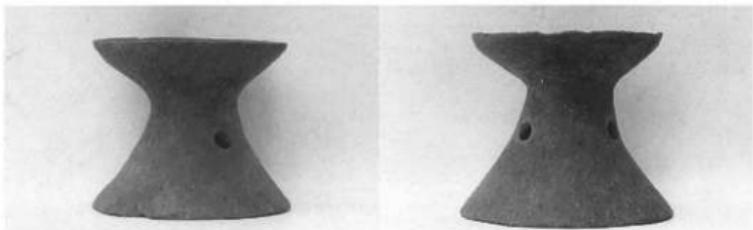


写真23 2号住居址出土遺物



写真24 2号住居址出土遺物



写真25 2号住居址出土遺物



写真26 2号住居址出土遺物



写真27 2号住居址出土遺物



写真28 2号住居址出土遺物



写真29 2号住居址出土遺物

2号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口径×器高×底径)	残存	摘要
1	土師器壺	- × - × 7.2		胴部下位が膨らみ、外面には密に縦の籠磨きあり。内面は窪削りで、胴部上位に輪積みの痕跡あり。
2	土師器壺	12.8 × 15.5 × 6.5	完形	胴部下位に最大径を持ち、外反する口縁を持つ。胴部外面は斜めの籠磨き、口縁部の内外面は横の籠磨き。
3	土師器台付壺	25.2 × 36.1 × 11.7	完形	胴部上位に最大径を持ち、頸部は「く」の字に折れ、口縁は直線的に短く外傾する。台部は「ハ」の字に開く。口唇部に連続刻みあり。胴部は刷毛目の上に横の籠磨き。
4	土師器台付壺	17.6 × 30.1 × 11.3	完形	胴部上位に膨らみを持ち、頸部は「く」の字に折れ、口縁部は短く外傾し、台部は「ハ」の字に開く。外面は胴部中央が窪削り、上下部は撫で、胴部、口縁部に輪積み痕。
5	土師器器台	9.0 × 8.7 × 9.9	完形	器受け部は大きく外反し、胴部は「ハ」の字に開く。器受け部は横の籠磨き、胴部は縦の籠磨き。円形の透かし孔2個。
6	土師器器台	9.3 × 8.0 × 9.4	完形	器受け部は大きく外反し、胴部は「ハ」の字に開く。口唇部と接地面の径はほぼ同じ。口唇部と器受け部内面は横の籠磨き、胴部から頸部は縦の籠磨き、円形の透かし孔2個。
7	石製品 石皿	23.9 × 5.0	1/2	上下面ともに中央へ向かってなだらかに凹んでおり、一部に小さな孔あり。



写真30 2号住居址全景

### 掘立柱状遺構

本遺構は2号住居址の北東側6m程のところに確認された。構造は1間四方で、方位は2号住居址に平行するよう北から西へ大きくふれており、柱間は3.1mから3.5mと一定ではなかった。

柱穴はほぼ円形で、大きさは最大の西隅のものが長径80cm、短径70cm、最小は北隅で長径60cm、短径50cmであった。深さは、最深

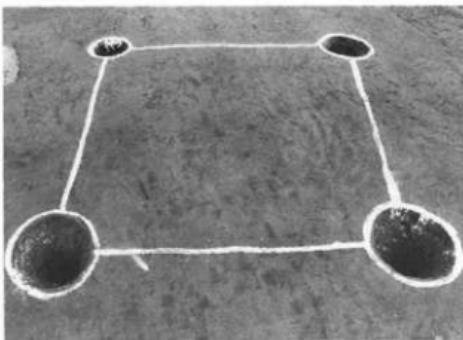
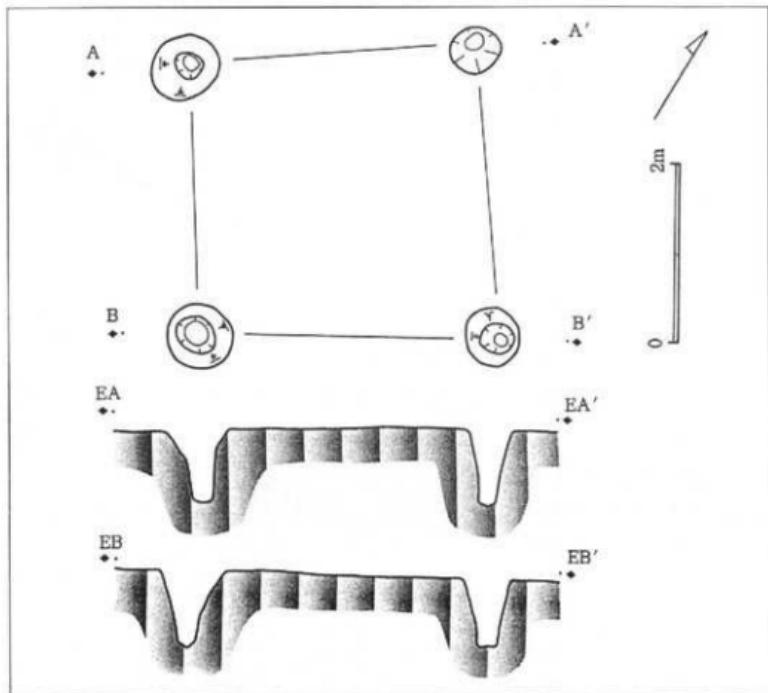


写真31 掘立柱状遺構全景



第12図 掘立柱状遺構平面図

の南隅が90cm、浅い東隅が80cmであった。覆土中からの遺物の出土はなかった。

当遺構の時代については、遺物の出土がなかったため比定し得ないが、2号住居址に近接し、方位も近似しており、本遺構に関連すると思われる他の遺構もないことから、2号住居址と時期を同じくする何らかの施設であったことも考えられる。

### 溝

溝は、1区、2区を合わせて16本が確認され、そのうちの13本が2区で確認された。大きさは、最大のものが1区2号住居址を切っていた2溝で、最大幅が1.7m余り、深さは50cm程度であった。中央部は2号住居址の覆土と重なっていたため崩れたのか、ふくらみをもっていた。3溝がこの2溝に次ぐ規模を持ち、最大幅1.5m、深さが50cm前後。1区西端の北壁際に確認され、調査区を二つに分けた道路跡でこれに沿うように鉤の手に曲がり、更に道路の下へと続いていた。また1溝は北から2溝へ接続する小規模な溝で、幅50cm、深さは20cm弱であった。2区の溝は平均幅70cm程度、深さは北側で深くなる傾向が見られた。

これらの溝については、その性格を比定し得る資料が得られなかったため用途等は不明であるが、2区に現れた溝は、その配置から耕作地等土地を区画したものとも考えられる。区画の規則性等については調査範囲が限られていたため、確認された2区での推定に過ぎないが、基本となる溝は北から30度程東へふれた南北方向の5溝、6溝、これと直交する東西方向の4溝、7溝で、この4本の溝に囲まれた区画は北東隅で若干の歪みが見られるものの、南北15m東西11mの165m<sup>2</sup>、50坪の長方形となっていた。ま



写真32 2区全景



写真33 溝

た、1区には2区に見られた溝の延長と思われるものが確認されなかつたことから、溝が掘られた時点で両者には土地利用上の違いがあり、当時既にこの土地を区画する部分としない部分との境界となっていたのが、今回1区と2区に分けた道路であったものと思われる。

遺物には、流れ込んだと思われる石斧が1点、15号溝から出土した。



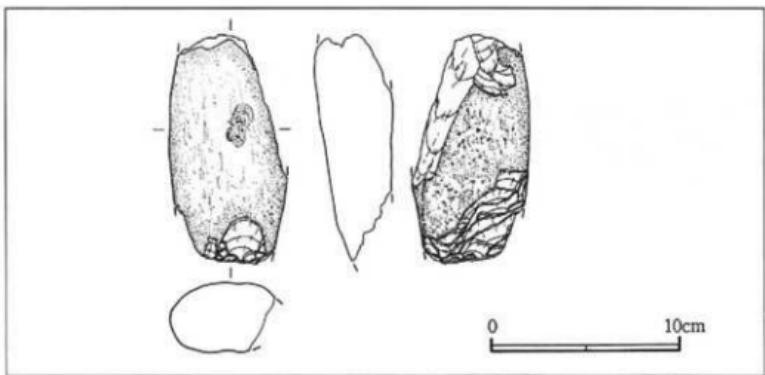
写真34 溝出土遺物

#### 2区出土遺物観察表

器種	法量	摘要
石斧	- × - × -	両端が剥離欠損している。



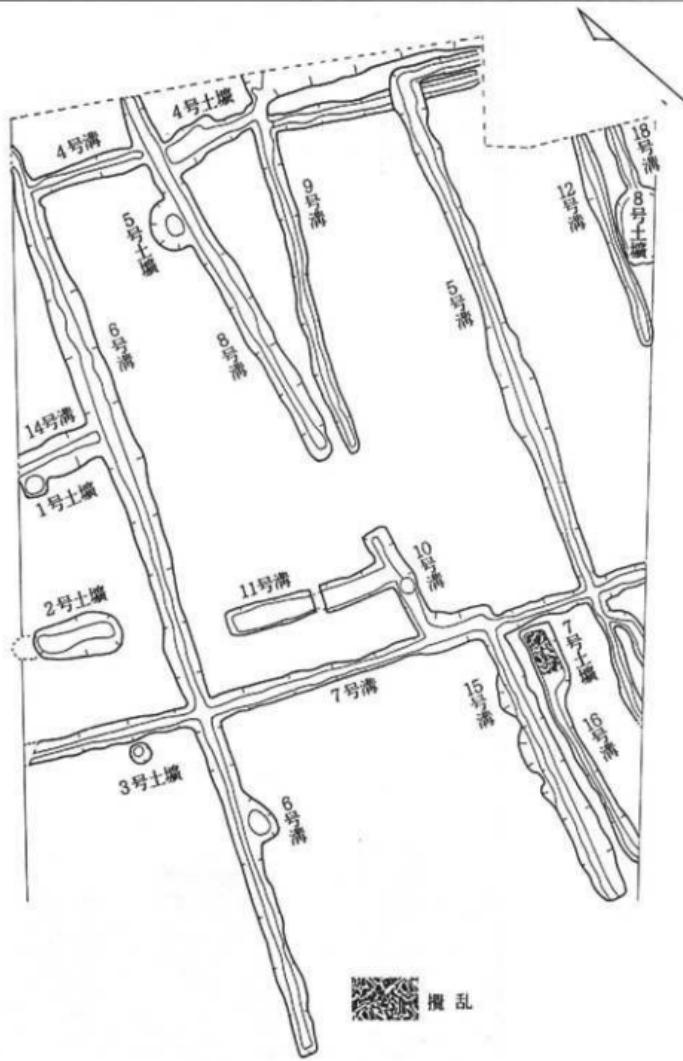
写真35 2区溝全景



第13図 溝出土遺物



写真36 大袋4遺跡遠景



第14図 2区溝平面図



写真37 2号住居址遺物出土



写真38 2号住居址遺物出土



写真39 1号住居址土層断面



写真40 2号住居址遺物取上げ



写真41 1号住居址完掘状態



写真42 2号住居址及び2号溝



写真43 1号住居址出土遺物



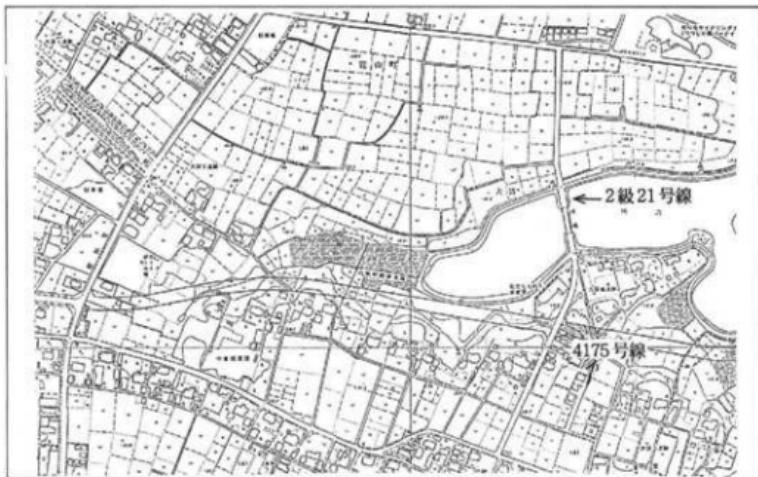
写真44 2号住居址出土遺物

## 第二節 大袋城遺跡

### 立地と環境

大袋城遺跡は、大袋4遺跡と同じく古城沼とその南の古城沼の二つの低湿地を核とした周辺台地上に分布する遺跡の一つである。古城沼にはその中央部へ向かって南西から半島状に突き出す洪積台地があり、南西側を除いた三方を古城沼及びこれに伴う低湿地に囲まれたこの台地上とその付け根付近には以前より中世城館址の大袋城が推定され、これが大袋城遺跡である。現在台地上は宅地化された部分が多く、城館としてのかつての面影を留めていると思われる部分は限られている。この長さ200m弱、中央部の幅約60mの半島突端と、今回この大袋城遺跡と合わせて調査を行った東方台地上の大袋4遺跡とは、古城沼を挟んで直線で100m余りの距離にある。

周辺に分布する遺跡は、前述の大袋4遺跡のとおりである。今回大袋城遺跡で調査対象となつたのは、古城沼の南岸沿いをほぼ東西に走る道路工事施工区間内で、半島状台地の付け根部分であった。調査区付近の標高は20mで、周囲を取り巻く低地との比高差は4m、台地の付け根を東西に横切る調査区からは、その延長上に東と西に古城沼とその周辺低地が間近に望まれた。一帯には雑木林や住宅が散在し、長さ約65m、幅17mの調査区は住宅地、駐車場となっていた。



第15図 大袋城遺跡調査地位置図

## 調査の概要

調査の範囲は、前述のとおり大袋城遺跡を載せる半島状台地の付け根にあたる部分で、試掘により遺構の推定された台地を南北に縦断する市道2級21号線と市道4175号線に挟まれた部分と、この東側で市道4175号線に接する、台地が低湿地へ落ち込む部分であった。

調査区の北側にはこの半島状台地の先に古城沼が望まれ、更に北方には城沼と古城沼を隔てる標高21m弱の洪積台地が横たわっている。南側に広がる洪積台地上には、雜木林や畠地の中に古くからの農村集落が点在し、東側には半島状台地と南側の洪積台地に挟まれた小規模な谷が延び、西側とともに古城沼とその周辺低地が迫っている。調査区は上述の市道4175号線を挟んで西側を1区、東側を2区とした。

この大袋城遺跡では、平成4年度に一度調査が行われている。この時は、中世城館を想定しての調査であったが、城館に関わる遺構、遺物は確認されず、古墳時代前期と推定された竪穴住居址1軒と時期不詳の大きく擾乱された竪穴住居址が確認され、当遺跡が中世城館と古墳時代の集落との複合遺跡であることが明らかとなった。



写真45 大袋城遺跡遠景



写真46 大袋城遺跡調査前



写真47 重機による掘削

今回調査対象となったのは平成4年度調査区の隣接地で、両調査区には土地に高低差が見られず、今回の調査区は宅地としてかなりの削平を受けてはいるものの、住居址の遺存が推定された。また1区東端には、調査区を斜めに横切るように東から北へ30度程ふれて、土壘と思われる盛り土とその南にこれに付随する堀を思わせる窪地が平行していた。盛り土と窪地の比高差は約3m

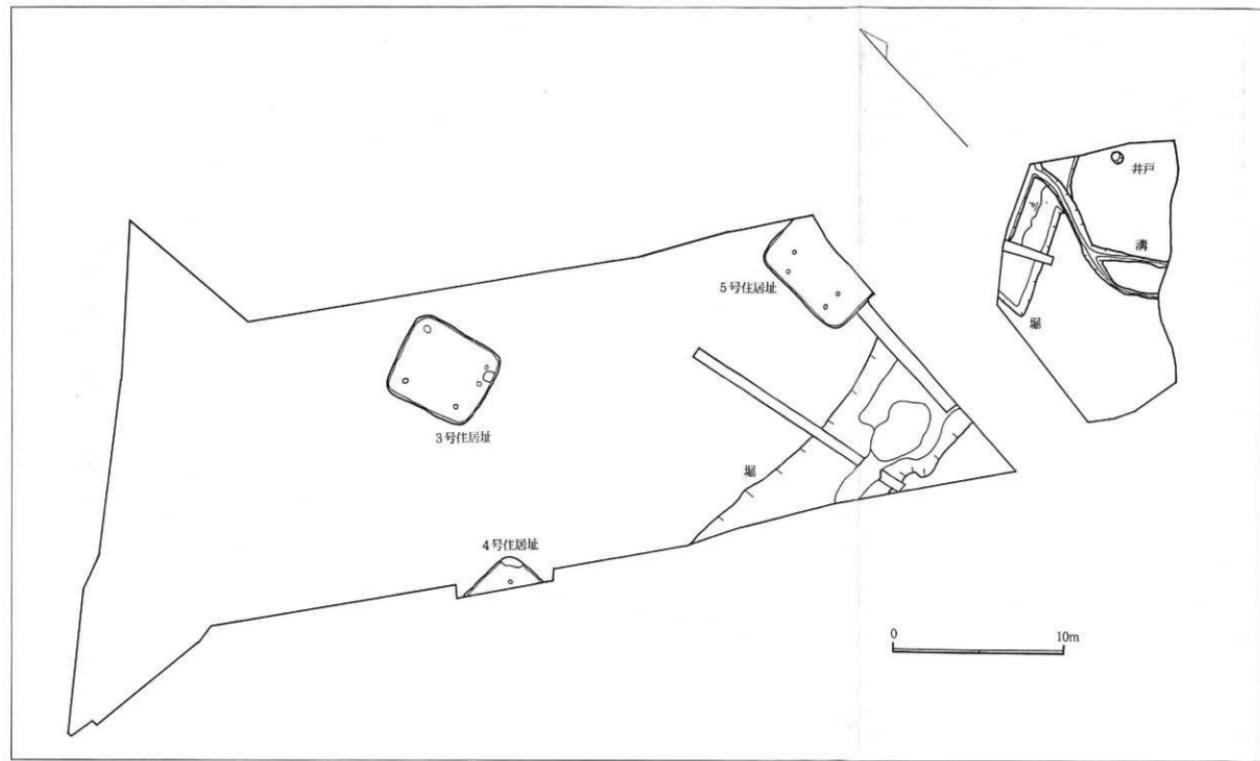
で、盛り土は窪地からは見上げる程の高さとなっていた。そしてこの堀と考えられた窪地の延長が市道を越えて更に東へ延びているものと推定されたため、市道の東側でローム面がテラス状となって低地へ落ち込む部分までを2区として調査を行った。

今回の調査区内には、上述のとおり城館に伴うと思われる土壘及び堀の一部が残存しており、ラジコンヘリによる現況測量から開始することとした。しかし、強風による中断が続いたため、郭内と推定された盛り土西側の表土除去を平行して行い、逐次盛り土から窪地、更に2区へと調査を進めた。

調査の結果確認された遺構は、1区に竪穴住居址3軒と土壘及び堀、2区では堀、二股に分かれた小規模な溝1本と井戸が1基であった。住居址は、平成4年度の1、2号住居址に続くものとして1区中央やや北寄りのものから3号住居址、その南で調査区内に住居址の一部が検出されたものを4号住居址、更に1区東端北側で土壘調査後その下に半分程残存していたものを5号住居址とした。住居址は、出土した土器から大袋4遺跡同様古墳時代中期前半を考えたい。平成4年度調査の1号住居址は出土した1個体の壺から古墳時代前期を推定したが、今年度の調査結果と合わせて1号住居址も古墳時代中期前半と考えたい。また、今回の3軒の住居址はいずれも床面から炭化材が検出され、1号住居址と同じく焼失住居であったと思われる。大袋4遺跡の2軒の住居址と合わせ、今回確認された竪穴住居址5軒はすべて焼失したものと思われる。また土壘及び堀と推定された盛り土と窪みは、土層断面、出土遺物から城館に伴う人工的な構築物である土壘、堀の痕跡であると考えられた。2区で検出された溝は堀を斜めに切るように東の湿地へ向かって延び、途中から二股に分かれていた。一部にはAs-A降下軽石層の堆積が見られ、その様子から近世以降のものと考えたい。井戸は、2区北辺の東寄りに確認され、やはり近世以降のものと考えたい。



写真48 作業風景



第16図 大袋城遺跡調査区全体図

### 3号住居址

本住居址は1区中央やや北寄りに確認され、今回大袋城遺跡の中で住居址全体を調査できたのはこの3号住居址のみであった。平面形は住居址の対角線がほぼ東西南北となっている隅丸方形の竪穴住居址であった。四辺の長さは、北東辺5.7m、南西辺5.5m、北西辺5.1m、南東辺4.9mと一定ではないが、対辺の差はいずれも20cm程度で北西・南東方向の若干長いややいびつな長方形となっていた。

確認された壁高は、西隅から南隅にかけて比較的高く残存し30cm強、低かった東隅で約20cmであった。壁溝は検出されなかった。

柱穴は、住居址内に5ヶ所の小穴が確認された。うち4ヶ所はほぼ住居址の対角線上にあり、北及び西隅のものが住居址壁からの垂線が80cm前後であったのに比べて、南隅のものは住居址壁より1m弱、東隅のものは南東壁より60cm、北東壁より90cmと、南隅のものが内側に、東隅のものが外側にやや寄っていた感があった。深さは、南隅のものが65cm弱だったほかはほぼ55cmで、標高では西隅以外が19.2m弱、若干浅かった西隅のものでも19.25mと



写真49 3号住居址全景



写真50 3号住居址遺物出土



写真51 3号住居址遺物分布

5cm程の違いであった。直径は、一回り大きかった北隅のものが長径35cm、短径が25cmで、他は長径30cm、短径20cm余りの楕円形であった。以上の4基の小穴を主柱穴と考えたい。また、住居址の対角線上になかった1ヶ所は、東と南隅の小穴の中間やや東寄りに位置し、深さ、標高とともに南隅のものに近似し、直径は30cmで円形に近かった。

貯蔵穴は、東隅にあった柱穴に隣接して南、南東壁の直下に確認された。大きさは長辺60cm、短辺50cmで接する壁方向にやや長い長方形となっており、深さは45cm余りであった。覆土から遺物の出土はなかった。

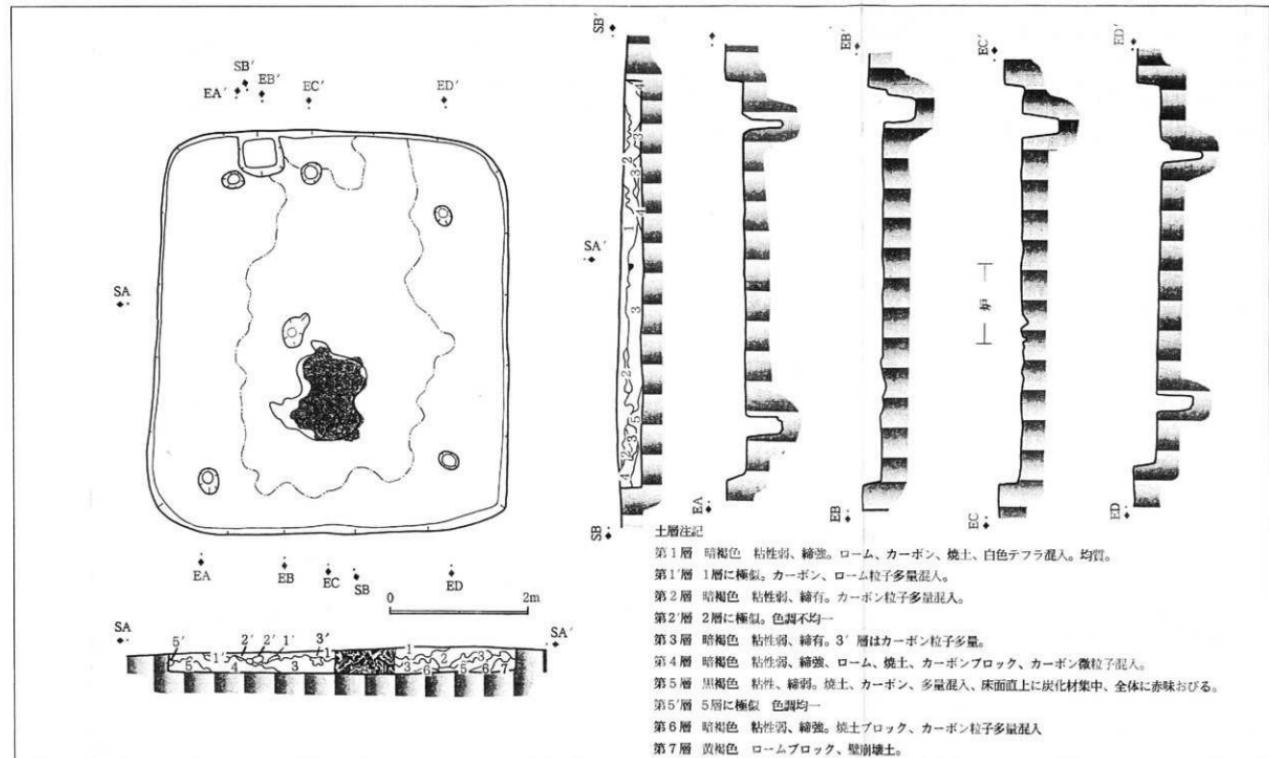
炉は、住居址の中央部と北西壁との中間付近に確認された。形状は、床面を掘り廻めたのみの不整形な円形で、確認できた規模は直径30cm、深さは10cm程度であった。炉の周囲には、炉から住居址の中央へ向かって長径1.2m、短径90cmの不定形な範囲に焼土の堆積する層が広がっていた。

床面には、北及び西隅の柱穴付近から貯蔵穴のあった南東壁際へかけて、帯状に継ぎた部分が広がり、全体的に南隅から北隅へかけて10cm程度低くなる傾向となっていた。また床の直上は炭化物や焼土を含む層となっており、床には一部炭化材が残っていた。これらの炭化材や焼土は、当住居址が焼失住居であったことを窺わせるものであった。

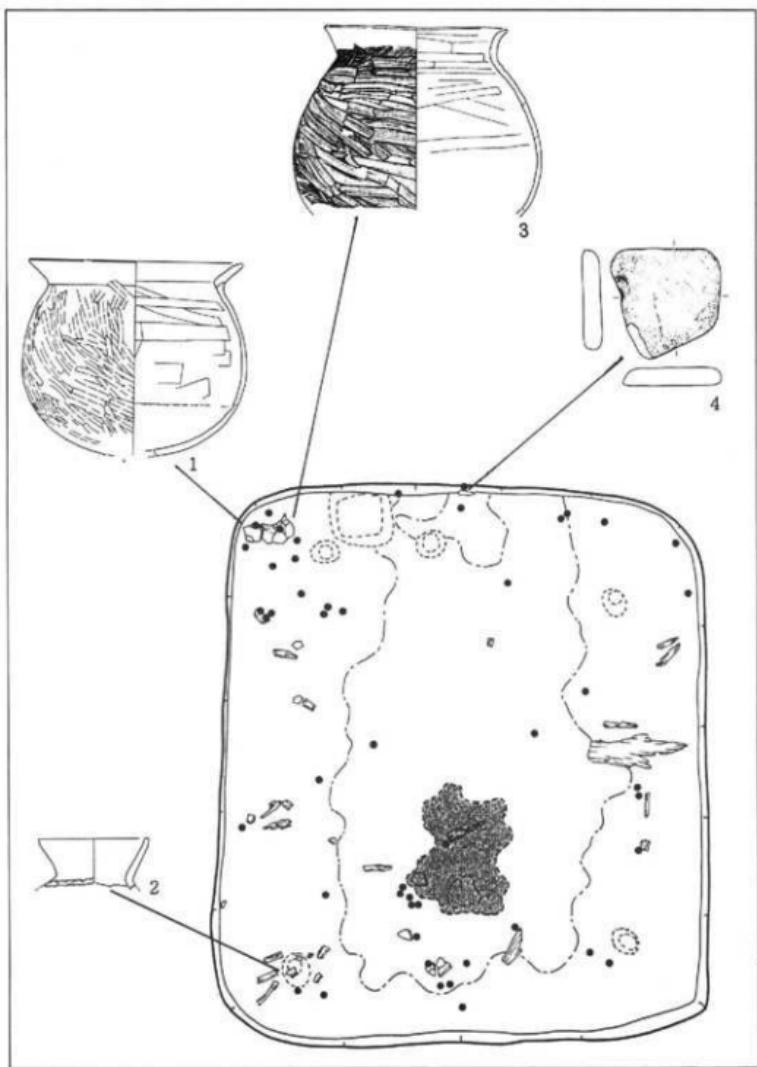
出土遺物としては、発達した折り返し口縁を持った壺のほか、甕、用途不明の石製品が出土した。



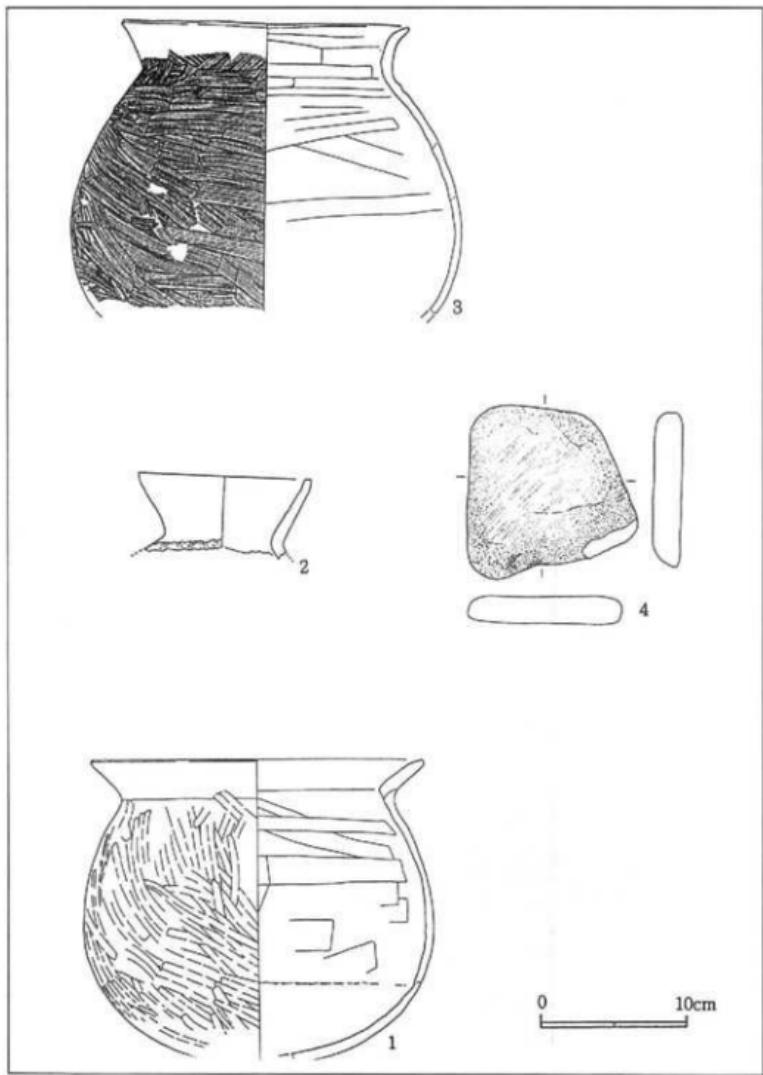
写真52 3号住居址全景



第17図 3号住居址平面図



第18圖 3号住居址遺物分布圖



第19図 3号住居址出土遺物



写真53 3号住居址出土遺物



写真54 3号住居址出土遺物



写真55 3号住居址出土遺物



写真56 3号住居址出土遺物

### 3号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口径×器高×底径)	残存	摘要
1	土師器壺	22.9×-×-		胸部下位にやや膨らみを持ち、平らに近い丸底となっている。口縁部は直線的に短く開く。胸部外面は斜めの籠削り内面は横の籠削り。内面下位に輪積みの痕跡あり。
2	土師器壺	11.5×-×-	口縁部のみ	頸部は「く」の字に外傾し、直線的に大きく立ち上がる。口唇部内面は横拂で、外面は籠削り。
3	土師器壺	19.7×-×-		胸部下位に最大径を持ち、頸部は「く」の字に外傾し、口縁部は短く立ち上がる。外面は横の刷毛目、内面は横の籠削り。
4	石製品	11.8×1.9		上下面ともにほぼ平面な不等辺四角形。

### 4号住居址

本住居址は、1区南辺の中央にその一部のみ確認され、住居址の大部分は1区南の調査区外へ広がっていた。確認されたのは住居址の北隅と思われる部分で、全体規模、平面形は不明であるが、平面形は3号住居址同様隅丸型の竪穴住居址であったと推定される。また、方位は3号住居址よりやや東へふれていた。

確認できた壁高はほぼ30cmで、壁溝は認められなかった。

柱穴は、主柱穴と思われる小穴が北壁及び東壁より1.2mの位置に確認された。深さは40cm余りであった。

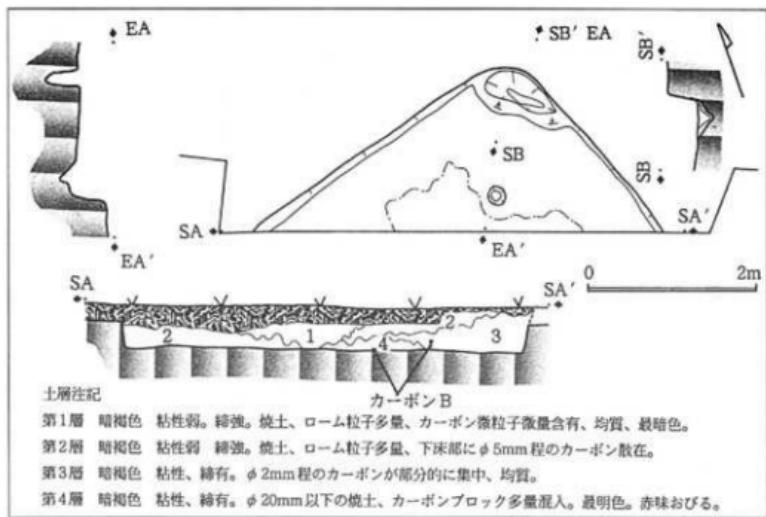
住居址の一部分の調査であったことから、貯蔵穴、炉は検出されなかったが、北隅の壁直下に長径1m、短径40cm、深さ20cm余りの細長い土坑が検出された。



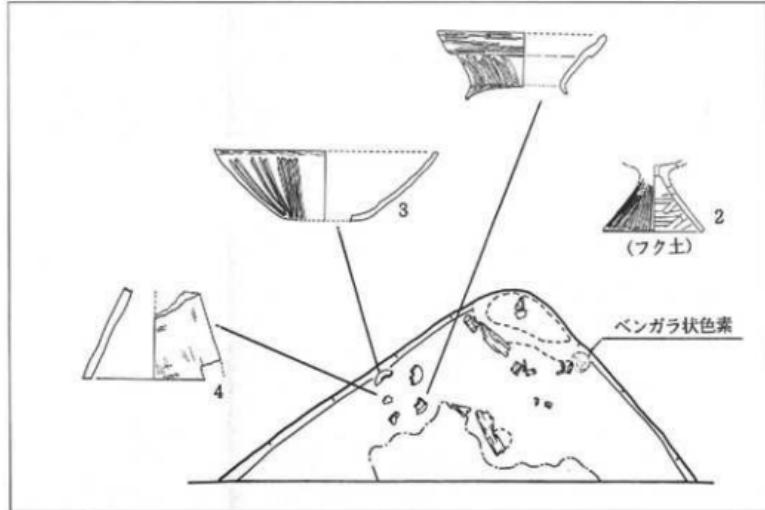
写真57 4号住居址遺物分布



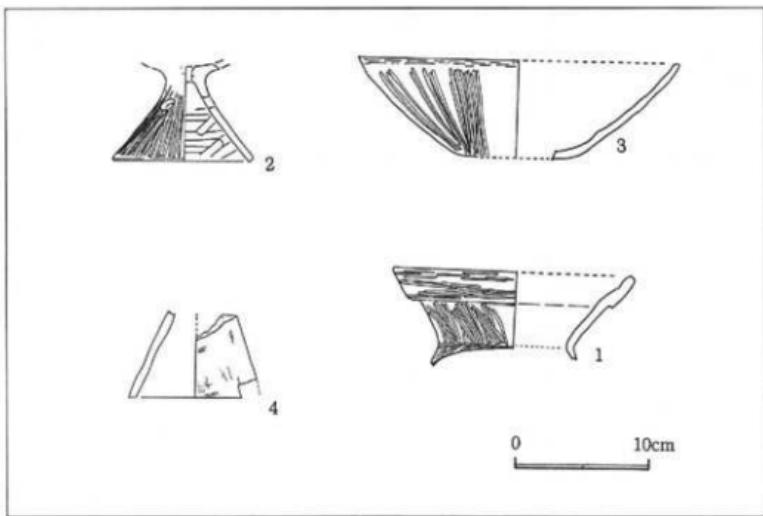
写真58 4号住居址遺物出土



第20図 4号住居址平面図



第21図 4号住居址遺物分布図



第22図 4号住居址出土遺物

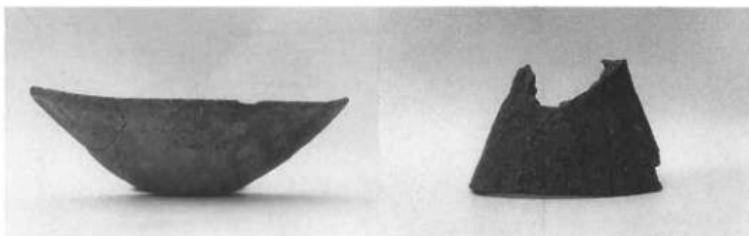


写真59 4号住居址出土遺物

写真60 4号住居址出土遺物

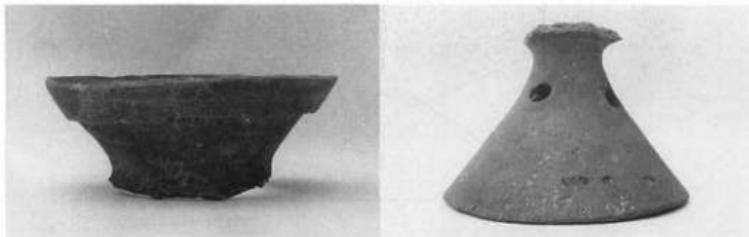


写真61 4号住居址出土遺物

写真62 4号住居址出土遺物

床面には柱穴付近から南の住居址中央へ向かって縮まった部分が見られ、直上には多量の炭化物や焼土を含む層が堆積し、3号住居址同様に床に炭化材が検出され焼失住居であったと考えられる。また、北隅の土坑と柱穴との中間付近の覆土には、ベンガラ状の赤色を帯びた土の堆積が見られた。

出土遺物には、器台、発達した折り返し口縁を持った壺と思われるものの口縁部などがあつた。

#### 4号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口径×器高×底径)	残存	摘要
1	土師器壺	18.3×-×-		口縁部は外傾して大きく立ち上がり、折り返しとなっている。折り返し部、口唇部内面は横撫で、口縁部内外面は継の籠磨き。
2	土師器 器台	-×-×10.3	胴部のみ	胴部は「ハ」の字に開き、外面は継の籠磨き、内面は横の刷削り。透かし孔2個。
3	土師器鉢	-×7.8×-	1/3	体部は内縛気味に立ち上がる。口唇部内外面は横撫で、体部の内外面は継の籠磨き。底部の一部が残存する。
4	土師器脚	-×-×-	台部のみ1/2	「ハ」の字に開く。内面下位は横の刷毛目。外面は継の刷毛目。



写真63 4号住居址全景

### 5号住居址

本住居址は、1区東端で一部調査区北辺にかかるて検出された。

土塁構築土除去後、堀断面の観察用サブトレーンチ掘削時に、土塁下の旧表土と思われた黒色土中より土器が出土したため、周辺の再精査後住居址であることが確認され、5号住居址とした。住居址は推定で西側の2分の1強が調査されたが、未調査となった東側の2分の1は1区と2区を分けた市道により既に破壊されたものと思われる。平面形は、当遺跡で調査された他の住居址同様圓丸方形の堅穴住居址であったと推定される。

方位は4号住居址に近く、唯一確認された住居址西辺の長さは6.3mであった。

確認された壁高は、調査前既に擾乱の著しかった北側では浅く10cm余り、高く残っていた南側で40cm程であった。壁溝は検出されなかった。

柱穴は住居址内の4ヶ所に小穴が確認された。位置は、西壁から70cmと1.8m程のところに西壁に平行するように2基ずつ並び、外側北寄りのものが北壁から1.8mであったのを除いて、ともに南、北壁から1.4m前後であった。深さは、内側北寄りのものが50cmで



写真64 5号住居址全景

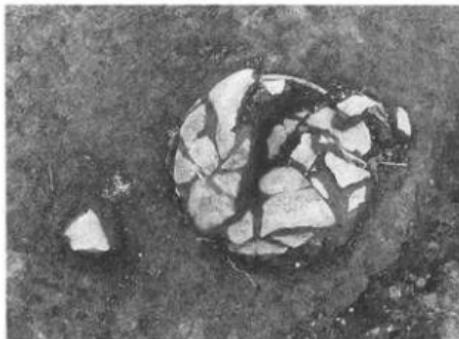
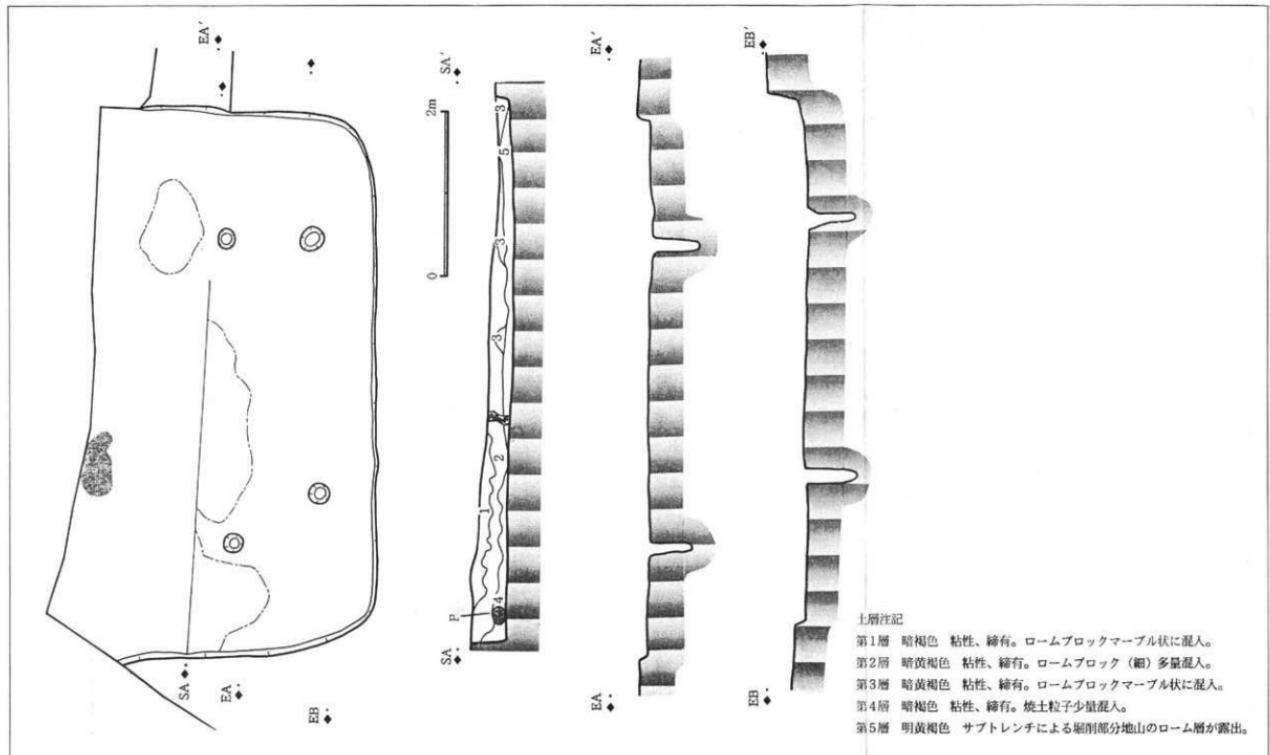
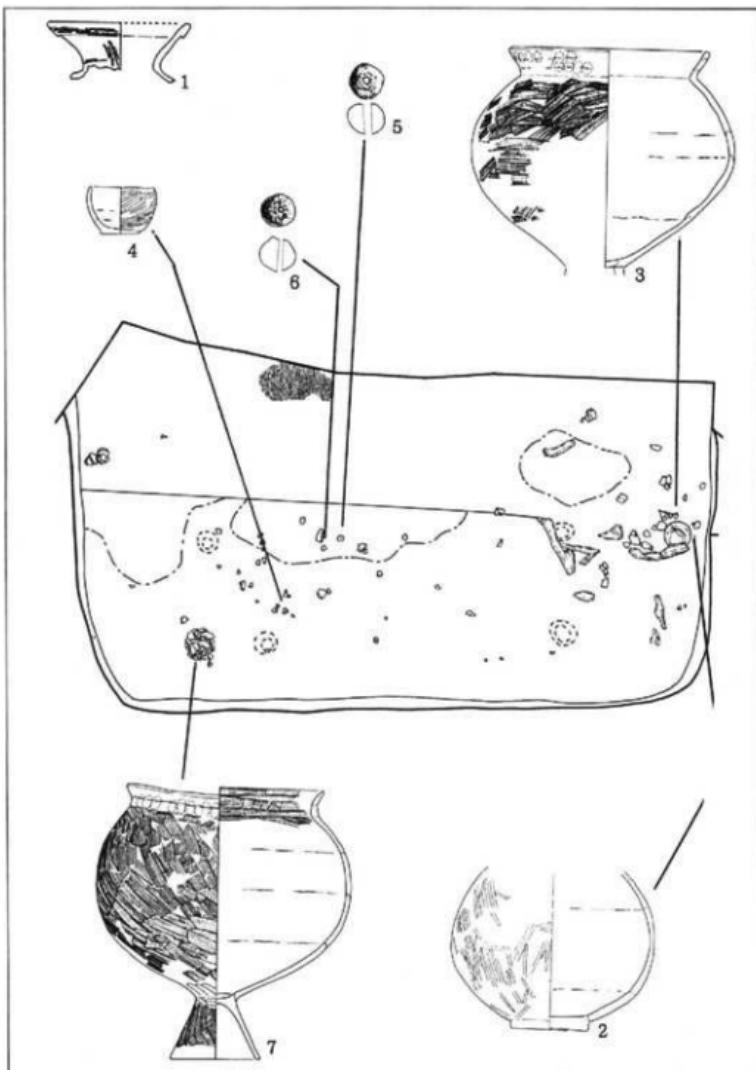


写真65 5号住居址遺物出土



写真66 5号住居址遺物分布





第24図 5号住居址遺物分布図

あったほかは60cm前後で、直徑はいずれも20cm前後であった。主柱穴は、いずれとも判然としないが、内側の2ヶ所に可能性が考えられる。

貯蔵穴、炉は未検出であったが、炉についてはサブトレチ掘削時に、道路際北寄りで焼土の痕跡が認められた。この焼土部分が炉であった可能性がある。位置は、1及び3号住居址に類似するものと思われる。

床面には、道路側の小穴付近からサブトレチまでと、道路側南寄りの小穴の東に一部縮まった部分が見られた。やはり床の直上には炭化物、焼土、一部炭化材も残り、他の住居址同様焼失した住居であったと思われる。

出土遺物には、台付壺のほか、手捏土器、土玉等があった。



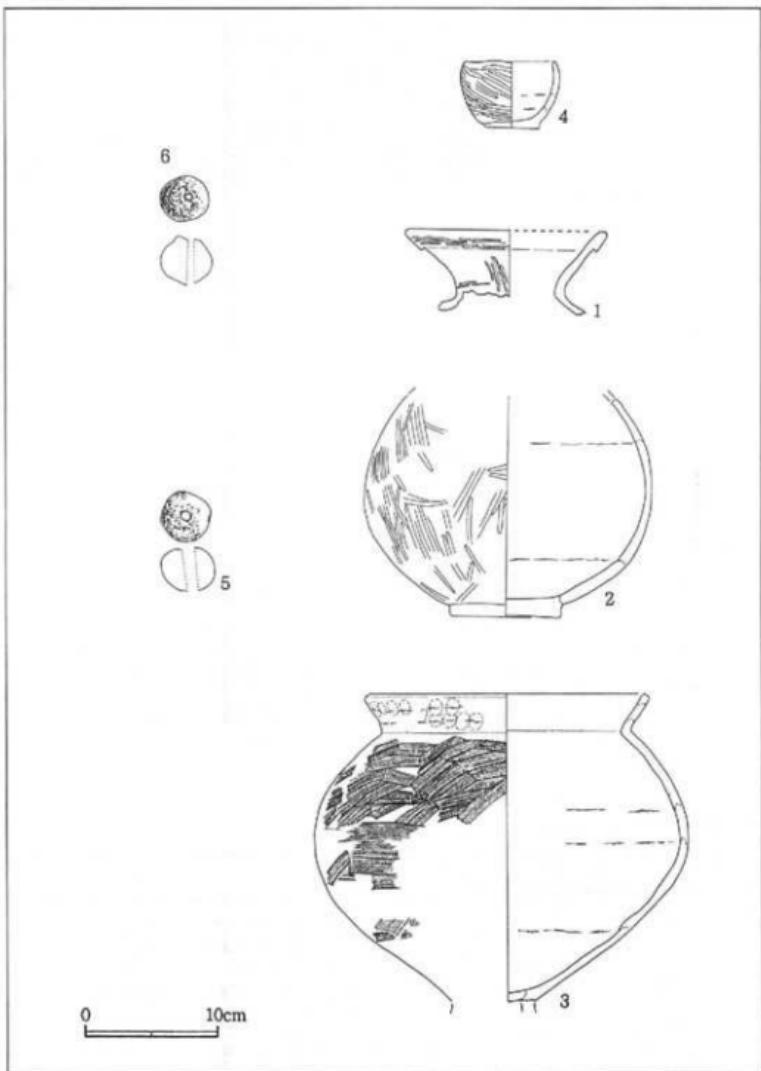
写真67 5号住居址土層断面



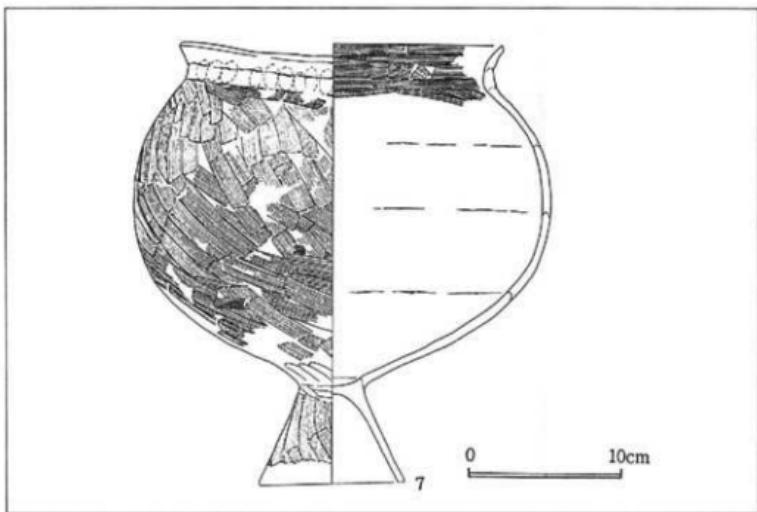
写真68 5号住居址と土塁

### 5号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口徑×器高×底径)	残存	摘要
1	土師器壺	-×-×-	口縁部 2/3	口縁部は直線的に開き立ち上がり、折り返しとなっている。頸部内面は刷毛目、折り返し部は横撫で。
2	土師器壺	-×-×8.1		胴部下位に膨らみを持ち、外面は概ね継ぎの箆磨き。内面に輪積みの痕跡あり。
3	土師器台付壺	21.4×-×-	脚 欠 部 損	胴部上位に最大径を持ち、口縁は短く外傾する。脚部外面上半は斜めの刷毛目、下半は横の刷毛目、口縁部、胴部とともに輪積みの痕跡あり。



第25図 5号住居址出土遺物（1）



第25図 5号住居址出土遺物(2)



写真69 5号住居址出土遺物



写真70 5号住居址出土遺物



写真71 5号住居址出土遺物



写真72 5号住居址出土遺物



写真73 5号住居址出土遺物



写真74 5号住居址出土遺物



写真75 5号住居址出土遺物



写真76 5号住居址全景

4	土師器手 捏土器	6.8 × 5.0 × 4.0	完 形	口唇部付近で内傾する湯呑み型で、外面は横の籠麻き、内面に輪積みの痕跡を残す。
5	土師器 土玉	3.7 × 3.0	完 形	やや潰れた球形をなし、表面に直径1mm程の小穴あり。中心部に穿孔あり。
6	土師器 土玉	3.7 × 3.6	完 形	歪な球形をなし、表面に直径1mm程の小穴あり。中心部に穿孔あり。
7	土師器 台付甕	21.1 × 29.0 × 9.5	完 形	胴部上位に膨らみを持ち、口縁は短く外傾し、台部は「ハ」の字に開く。口縁部内面、胴部、台部外面は刷毛目、口縁、胴部に輪積み痕あり。

### 土壘

土壘と推定された盛り土状の高まりは、1区東端にかなりの削平を受け一部分のみその痕跡を残していた。現況で長さ約12m、幅8m程を残し、堀が埋没したものと思われた南側窪地からの比高差は3m弱であった。

断面土層の観察からは、人為的に



写真77 土壘断面



写真78 土壘現況

積み上げられた土壘状の断面形、堆積状況が良く現れていた。ほぼ水平なロームの地山の上に、土壘構築の際の基礎層かあるいはその当時の表土層と思われる20cmほどの黒褐色系土が堆積し、更にその上に2cmから20cmほどの厚さで土質の異なる土を何層にも積み上げた山なりの堆積となっていた。外観では堀に面した郭外よりも郭内の傾斜の方が急であったが、これは近年の削平のためである。構築は、先ず堀際に基本的な形状を作り、更に被せるように郭内へ積み上げていったものと思われる。構築土の中には土器等の遺物は確認されなかった。

5号住居址は、この土壘の調査中、土壘の構築土を除去後サブトレンチ掘削時に1区東端から土壘の下に確認された。

### 堀

1区土壘盛り土の南側に、土壘に沿うように窪地があり堀跡と推定された。調査された範囲は、1区の南東隅とこの堀の延長上の2区の北西隅であった。いずれも調査範囲は極めて限られており、幅を確認できたのは1区の僅かな部分のみであった。確認できた幅は上端が約7m、下端は4.5m弱であつ



写真79 土壘調査状況



写真80 土壘



写真81 堀現況

た。深さは、地山が堀へと落ち込む際からで2m余り、現況の土壠上からでは4mを超えていた。2区では現況の道路下となり、堀幅、深さを捉えることはできなかつた。

今回調査された範囲での堀は箱堀様の形態となっており、1区では断面観察用のサブトレンチ付近で50cm程の高さで一段高くなり、その高さで西へ延びていた。

堀底には中央付近に、長径4m、短径2m余り、深さ20cm程の不定形な橢円を呈する堅穴状の掘り込みがあった。これは、その出土遺物から近世以降に掘られたものと推測される。

また、2区で確認されたこの堀の延長と思われる部分は、1区と2区を分けた市道際で立ち上がっていた。この立ち上がりは1区では確認できなかったが、こうした状況から内部へ通じる虎口であろうと推測される。仮にこの部分が虎口への通路であった場合、城門等の施設が考えられたが、今回の調査では、城門等何らかの施設に関わると思われる柱穴等の遺構は検出されなかった。

出土遺物には、内耳鍋片ほか、堀底より陶磁器片、瓦片等が出土した。



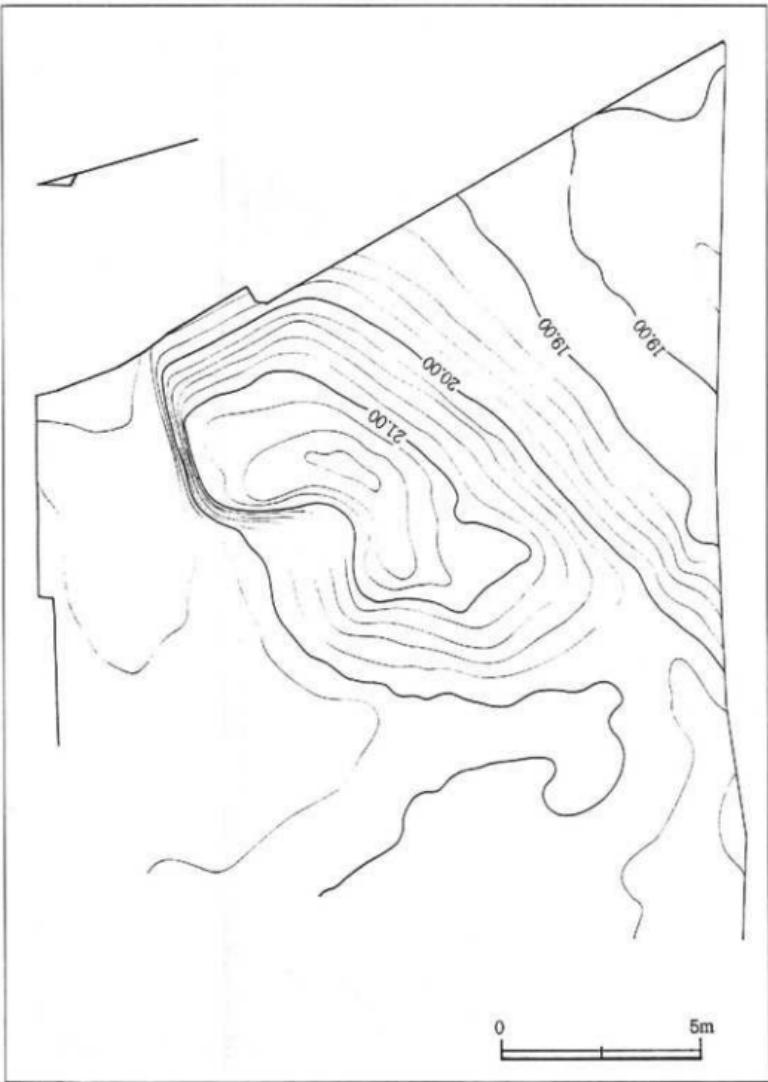
写真82 堀遠景



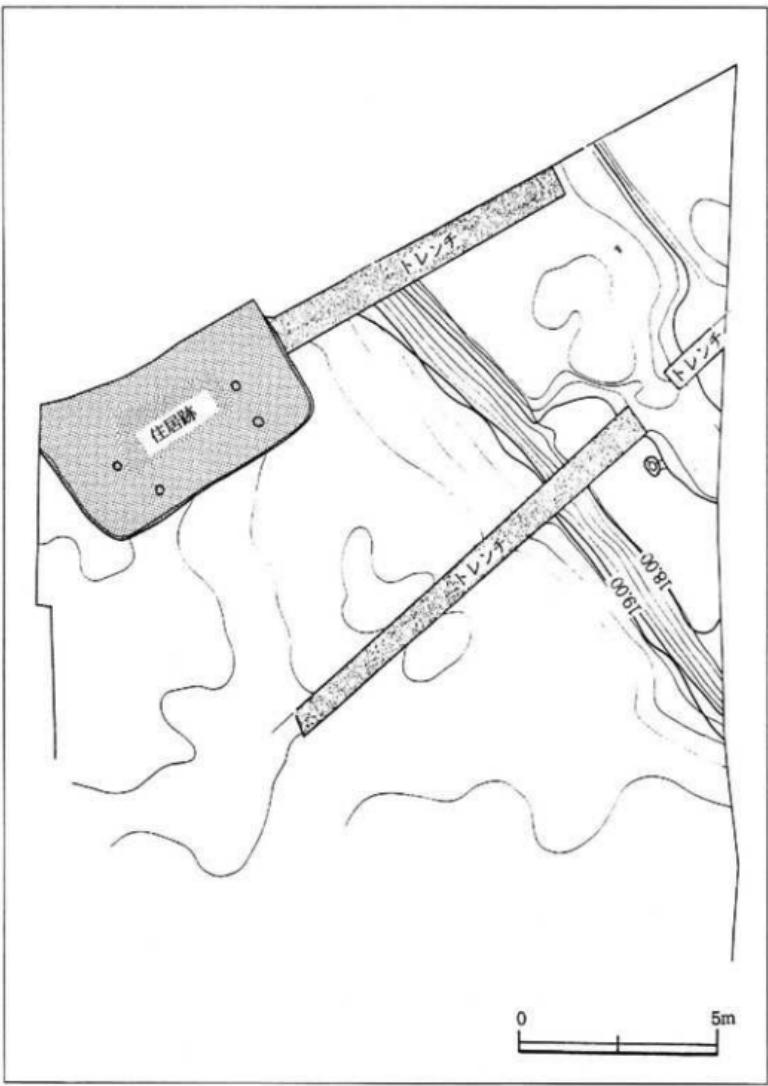
写真83 堀断面(東側)



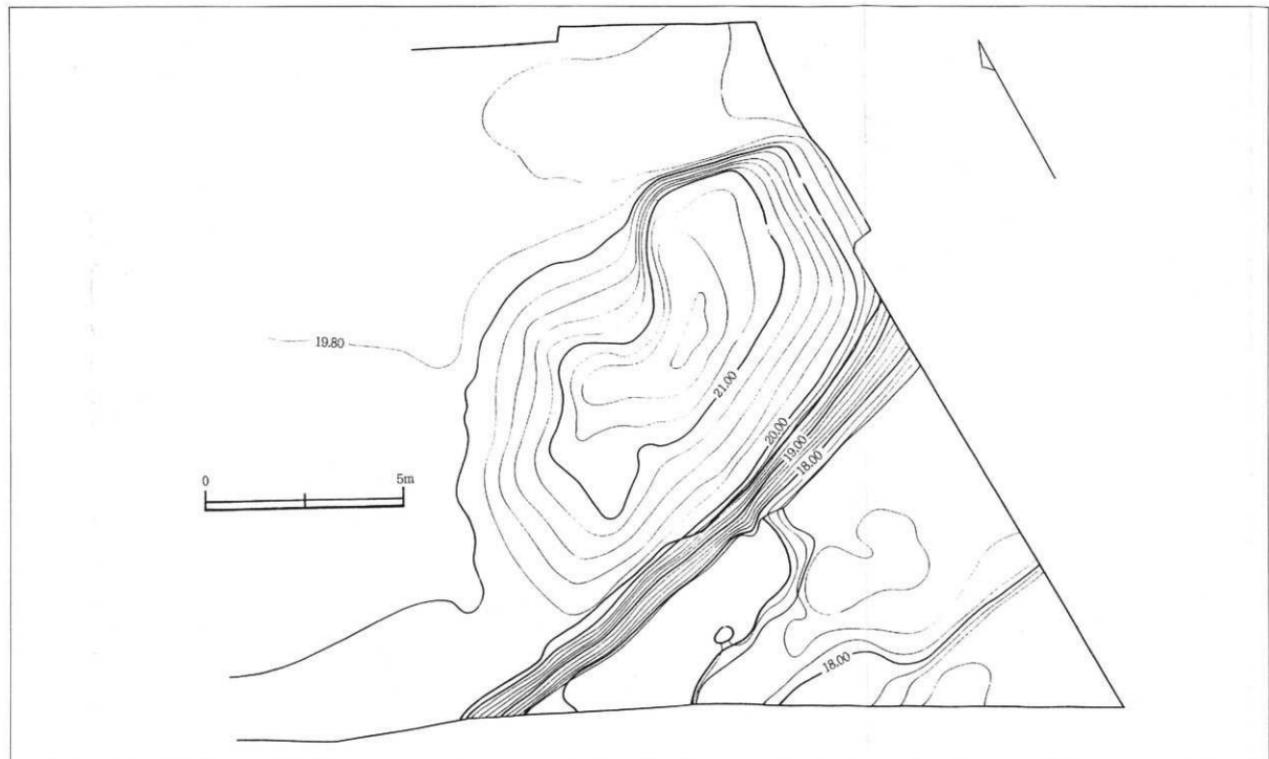
写真84 堀断面(西側)



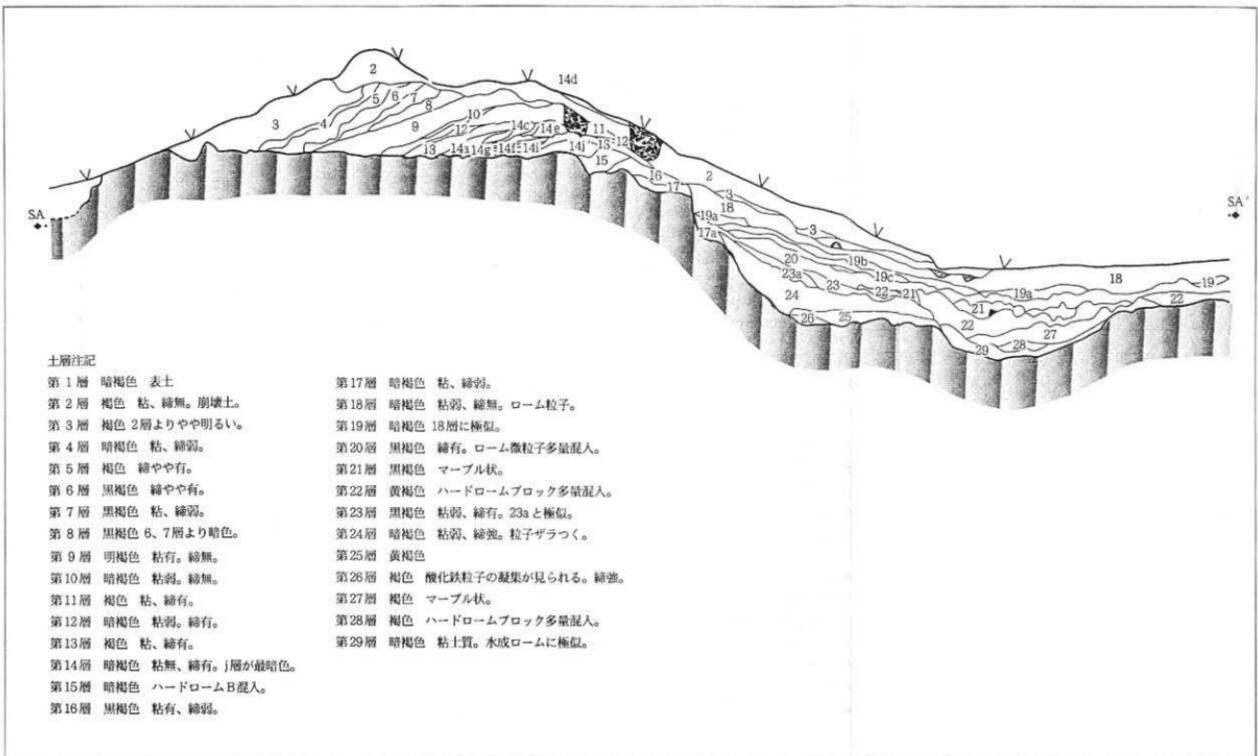
第26図 土壌現況図



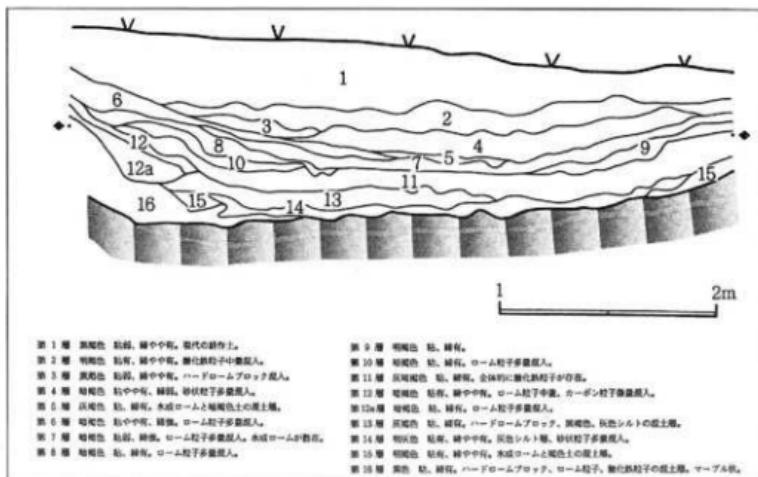
第27図 堀平面図



第28図 土壌及び堀合成図



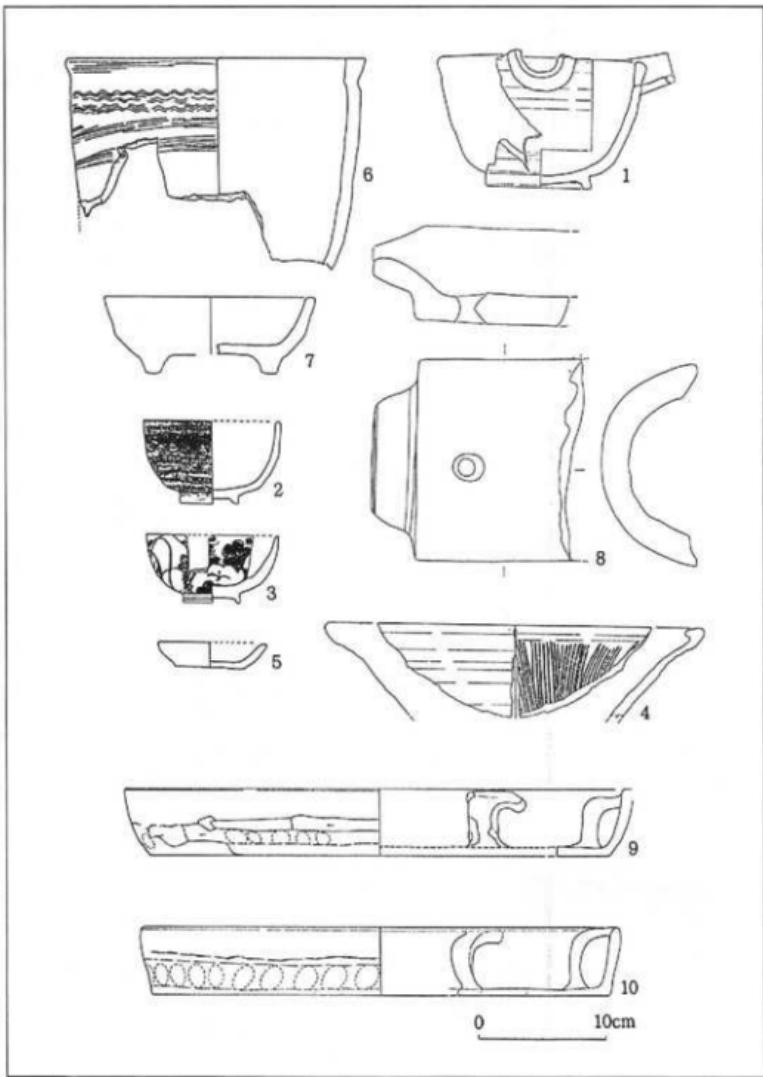
第29図 土壌及び礎土層断面図



第30図 堀土断面図

出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口径×高さ×底径)	産地	年代	摘要
1	陶器片 口	15.5 × 10.4 × 8.1	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。緑色斑と黄瀬戸釉。外面下半露胎。ロクロ右回転。
2	陶器碗	10.0 × 6.4 × 5.5	不明	18世紀	焼成締まる。胎釉。外面下半露胎。
3	磁器碗	10.3 × 5.2 × 4.9	伊万里系	18世紀末～19世紀初頭	焼成締まる。外面に梅花文あり。
4	陶器掘り鉢	- × - × -	信楽	18,19世紀	焼締め。浅く鉄釉掛か。内面に御目あり。ロクロ右回転。
5	土師器皿	8.7 × 1.7 × 5.5	不明	17,18世紀	焼成並。やや酸化気味。口縁部に吸炭部あり。ロクロ左回転。
6	軟質陶器深鉢	24.5 × - × -	在地	18,19世紀	焼成並。黒灰色。凍ハゼが内外面にあり。外面上方に波状文帯、園線帯の櫛搔きあり。



第31図 堀出土遺物

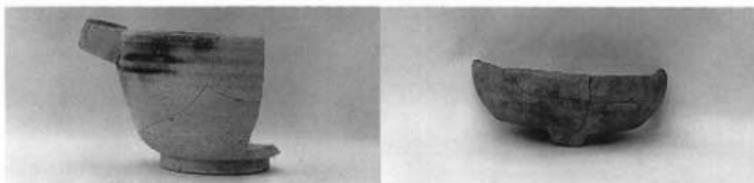


写真85 堀出土遺物



写真86 堀出土遺物



写真87 堀出土遺物



写真88 堀出土遺物

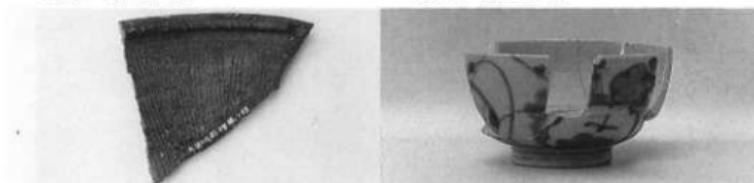


写真89 堀出土遺物



写真90 堀出土遺物



写真91 堀出土遺物



写真92 堀出土遺物

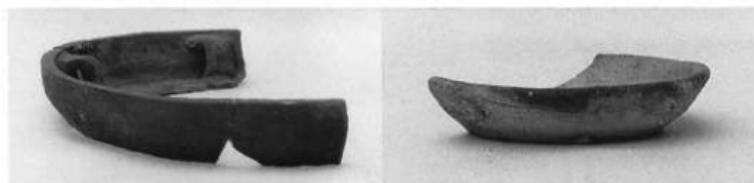


写真93 堀出土遺物



写真94 堀出土遺物

7	軟質陶器 香炉	16.0 × 7.0 × -	不明	不明	焼成並。ややいぶしがかかる。体部外面に横方向の研磨あり。紐の継ぎ目（型で作った上に紐を1本足す）
8	軟質陶器 丸瓦	長さ 幅 高さ - × 15.5 × 7.5	在地	不明	全体に強いいぶしあり。内面の編物は筵状。面取りは型か、釘穴があるため本来は鎧瓦の可能性あり。
9	軟質陶器 内耳埴塔	37.1 × 5.1 × 35.8	在地	18,19 世紀	焼成並、黄灰色、酸化氣味。口縁部直下の外面に横撫であり。外面上方に紐作り痕あり。外面に煤付着、片側に耳2個付着。体部下半に型肌痕あり。体部内面に研磨あり。撫で左回り。
10	軟質陶器 内耳埴塔	36.5 × 5.2 × 34.3	在地	18,19 世紀	焼成並、暗褐色。口縁部の外面に撫であり。紐作り痕あり。体部下半に型肌痕あり。全体にいぶしがかかる。耳1個残存。撫で左回り。



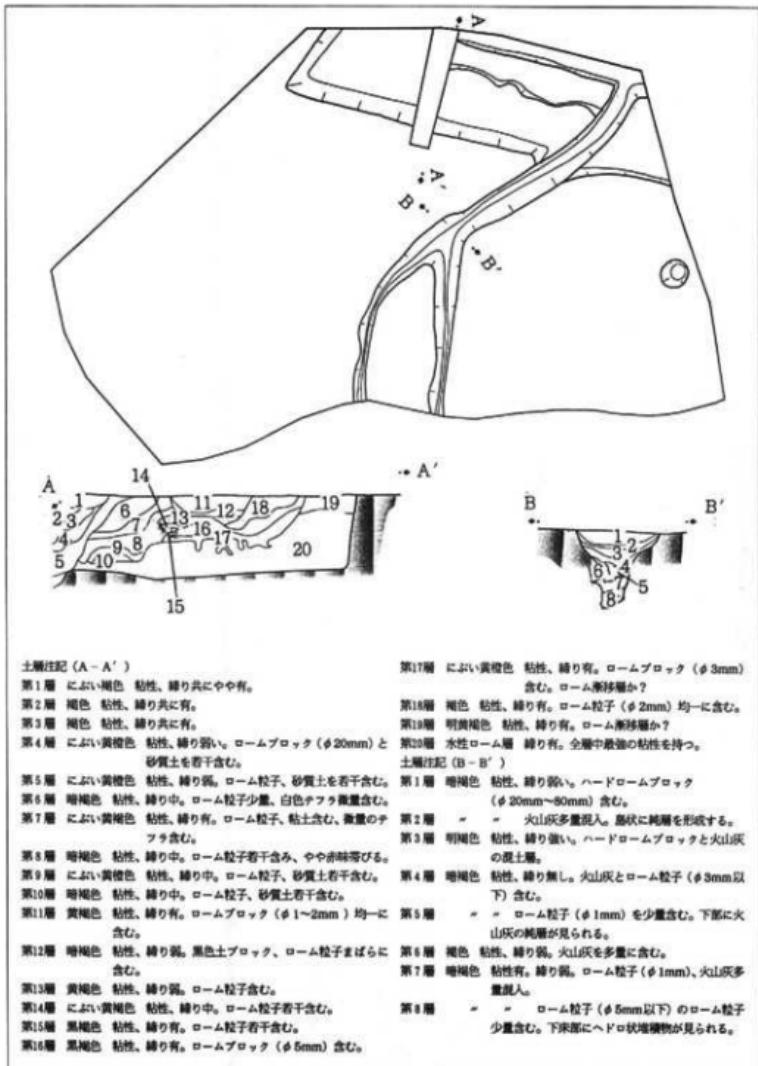
写真95 堀全景

### 溝

溝は、2区で確認された1本のみで、堀を南北に斜めに横切り2区の中央付近で二股に分かれ、東の低湿地へ向かって方向を変え細くなっている。分歧点付近での幅は80cm余り、深さは80cm弱であった。水流の方向については、黒色帶の部分を若干掘り過ぎてしまった感があり、はっきりと高低を確認できなかった



写真96 溝



第32図 2区溝・縦平面図

が、二股に分かれた先は徐々に細くなっていく様子であった。

遺物の出土はなかった。

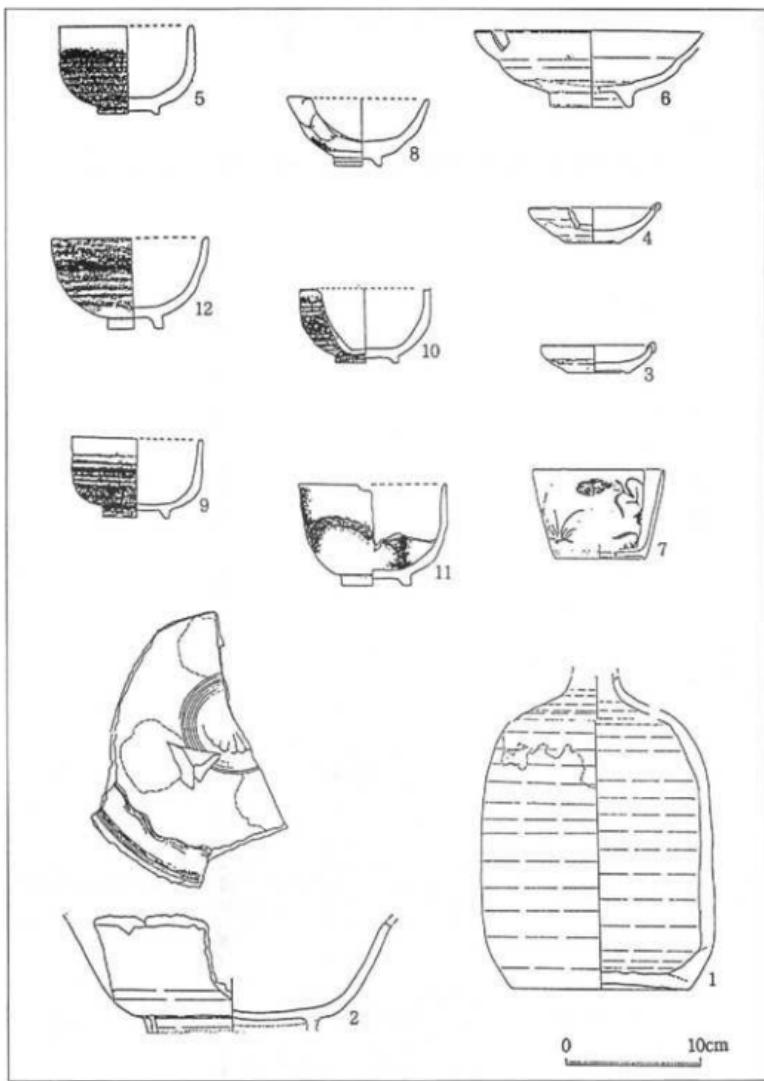
## 井 戸

井戸は、2区北端に検出した。直径約70cm、深さは1mほど掘った時点で湧水が激しく、未調査となつた。

覆土からは、陶器片多数が出土した。

井戸出土遺物観察表

番号	器種	法量 (口径×器高×底径)	産地	年代	摘要
1	陶器徳利	- × - × 13.0	不明	17~19世紀	焼締め。石美分強い。赤褐色から灰色・自然釉か。ロクロ右回転。
2	陶器鉢	- × - × 12.6	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。黄瀬戸。黄瀬戸釉と緑色釉斑。内面菊花印文、桙搔波状文・團文。内面にトチンの無釉斑あり。付高台。ロクロ右回転。
3	陶器燈火皿	8.0 × 2.0 × 4.8	瀬戸・美濃	18,19世紀	焼成締まる。始釉。外面下半露胎。削り出し高台。
4	陶器燈火皿	9.1 × 2.6 × 4.0	瀬戸・美濃	18,19世紀	焼成締まる。始釉。外面下半露胎。削り出し高台。煤付着。
5	陶器碗	10.3 × 6.4 × 4.8	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。鉄釉。透明釉との掛け分け。削り出し高台。ロクロ右回転。
6	陶器皿	16.8 × 5.7 × 5.8	不明	不明	焼成締まる。内面蛇目。外面下半露胎。
7	磁器そば猪口	9.6 × 6.5 × 6.6	伊万里系	18世紀末~19世紀初頭	焼成締まる。外面染め付け・草文。
8	磁器碗	8.8 × 5.0 × 3.6	伊万里系	18世紀前半	焼成締まる。外面に草文の染め付けあり。山貝須。削り出し高台。ロクロ右回転。
9	陶器碗	7.9 × 4.8 × 5.1	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。鉄釉・透明釉との掛け分け。削り出し高台。ロクロ右回転。
10	陶器碗	- × - × 4.8	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。鉄釉・透明釉との掛け分け。削り出し高台。ロクロ右回転。
11	陶器碗	11.3 × 7.4 × 5.1	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。外面に緑色釉による釉溜様の描き出しと黄瀬戸釉。外面下半露胎。ロクロ左回転か。
12	陶器碗	11.2 × 6.9 × 4.1	瀬戸・美濃	18世紀	焼成締まる。鉄釉。外面下半露胎。ロクロ右回転。



第33図 井戸出土遺物



写真97 井戸出土遺物

写真98 井戸出土遺物

写真99 井戸出土遺物

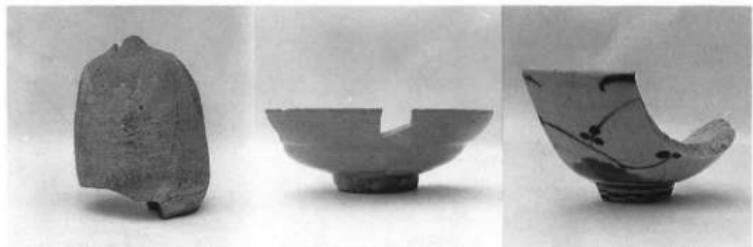


写真100 井戸出土遺物

写真101 井戸出土遺物

写真102 井戸出土遺物



写真103 井戸出土遺物

写真104 井戸出土遺物

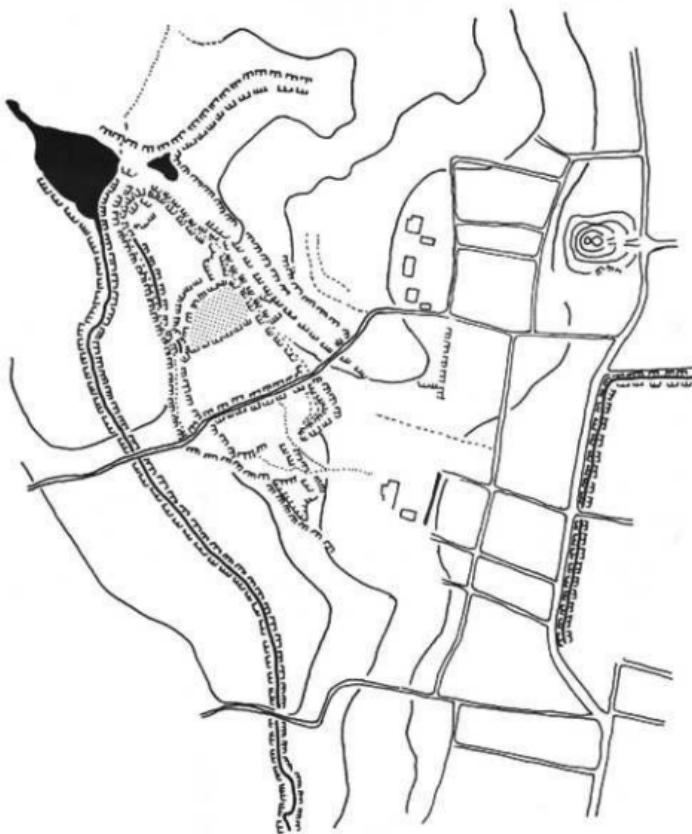
写真105 井戸出土遺物



写真106 井戸出土遺物

写真107 井戸出土遺物

写真108 井戸出土遺物



第34図 大坂城跡推測図（群馬県教委「群馬県の中世城跡」より）



写真109 大袋城遺跡遠景



写真110 大袋城遺跡調査区遠景



写真111 堀



写真112 調査区遠景



写真113 3号住居址土層断面

写真114 土壙



写真115 堀作業風景



写真116 3号住居址出土遺物



写真117 4号住居址出土遺物



写真118 5号住居址出土遺物

### 第三節 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

#### I. 大袋城遺跡のテフラ分析

##### はじめに

群馬県域には、赤城火山や浅間火山をはじめ多くの第四紀火山が分布している。これらの火山は人類紀とも呼ばれる第四紀を通して、大量のテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）を噴出してきた。とくに浅間火山や榛名火山は、縄文時代以降も何度も噴火を起こし、館林地方に多くのテフラを降らせてきた。これらのテフラの多くについては、すでに理化学的な年代測定の結果や考古遺物との層位関係、さらに古記録などをもとに噴出年代が明らかにされている。そして、これら示標テフラとの層位関係を求めて遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代を明らかにできるようになっている。

大袋城遺跡の発掘調査では、テフラ層が検出されたようである。調査担当者によりすでに採取されていたテフラ試料2点について、テフラ検出分析と屈折率測定を行って、2遺跡のテフラと示標テフラとの同定を試みることになった。

##### テフラ検出分析

###### (1) 分析試料と分析方法

テフラ分析の対象となった試料は、大袋城遺跡1区堀から採取された試料と2区溝から採取されたものである。これら2点の試料についてテフラ検出分析を行い、含まれるテフラ粒子の特徴の把握を試みた。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

###### (2) 分析結果

1区堀の試料には、スponジ状に比較的よく発泡した黄白色軽石が多く認められた。軽石の最大径は 2.2mm である。また2区溝の試料には、スponジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石が多く認められた。軽石の最大径は 2.1mm である。若干色調に違いはあるものの、前者には鉄分が若干付着しているのに対し後者の方がより新鮮なことに起因しており、両者は同一テフラに由来しているものと考えられる。軽石の特徴は、これらのテフラが 1783 (天明3) 年

に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992)に由来していることを示唆する。

### 屈折率測定

#### (1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象とした2試料について、示標テフラとの同定の精度をさらに向上させるために、位相差法(新井, 1972)により屈折率の測定を行った。

#### (2) 測定結果

1区堀の試料に含まれる軽石のガラス部の屈折率( $n$ )のrangeは1.507-1.518、またmodeは1.508-1.518である。重鉱物としては斜方輝石、单斜輝石、磁鐵鉱などが含まれており、斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は1.707-1.711である。重鉱物の組合せや火山ガラスさらに斜方輝石の屈折率は、As-Aの特徴と一致する。一方、2区溝の試料に含まれる軽石のガラス部の屈折率( $n$ )のrangeは1.507-1.517、またmodeは1.508-1.513である。重鉱物としては斜方輝石、单斜輝石、磁鐵鉱などが含まれており、斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は1.707-1.711である。重鉱物の組合せや火山ガラスさらに斜方輝石の屈折率は、1区堀の試料と同様にAs-Aの特徴と一致する。

### 小 結

大袋城遺跡において採取された1区堀および2区溝のテフラ試料について、各々テフラ検出分析と屈折率測定を行い、示標テフラとの同定を試みた。その結果、いずれの試料からも1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A)に由来する軽石粒子が多く検出された。ただし、As-Aの一次堆積層か否かについては、採取ずみの試料のみを分析しても言及の程度に限りがある。この問題の解決のためには、遺跡において土層の堆積状態の調査記載を行っておくことが重要である。

### 文 献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究.第四紀研究, 11, p.254-269.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質.地団研専報, no. 14, p.1-45.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス.東京大学出版会, 276p.

表1 大袋城遺跡のテフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
1区堀	+++	黄白	2.2
2区溝	+++	灰白	2.1

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度,  
 + : 少ない, - : 認められない. 最大径の単位はmm

表2 大袋城遺跡の屈折率測定結果

試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 ( $\gamma$ )
1区堀	opx > cpx, mt	1.507 - 1.518 (1.508 - 1.516)	1.707 - 1.711
2区溝	opx > cpx, mt	1.507 - 1.517 (1.508 - 1.513)	1.707 - 1.711

opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石, mt : 磁鐵鉱. 屈折率の測定は、  
 位相差法(新井, 1972)による.

## 2. 大袋4遺跡・大袋城遺跡出土炭化材の樹種同定

### 試 料

試料は、大袋4遺跡の1号住居と2号住居、大袋城遺跡の3号住居、4号住居、5号住居より出土した炭化材5点である。

### 方 法

試料は剖析して新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 結 果

結果は以下の表に示し、以下に記載を記す。なお各断面の顕微鏡写真を示した。

試 料	樹 種 ( 和名 / 学名 )
大袋4遺跡1号住居	コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops
大袋4遺跡2号住居	コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus
大袋城遺跡3号住居	コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops
大袋城遺跡4号住居	コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops
大袋城遺跡5号住居	コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops

コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科 図版1・2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晚材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晚材にかけて、道管の直径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、單列のものと広放射組織からなる。

以上の形質からコナラ属クヌギ節に同定される。クヌギ節にはクヌギ・アベマキなどがあり、本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、材は強く弹性に富み、器具・農具・船舶・薪炭・椎茸ほだ木などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の直径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと広放射組織からなる。

以上の形質からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ節にはカシワ・コナラ・ナラガシワ・ミズナラなどがあり、北海道・本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、材は強く従属性に富み、建築・家具・器具・薪炭・椎茸ほだ木などに用いられる。

参考文献

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織、地球社。

島地謙ほか（1985）木材の構造、文永堂出版。

日本第四紀学会編（1993）第四紀試料分析法、東京大学出版会。

大袋遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

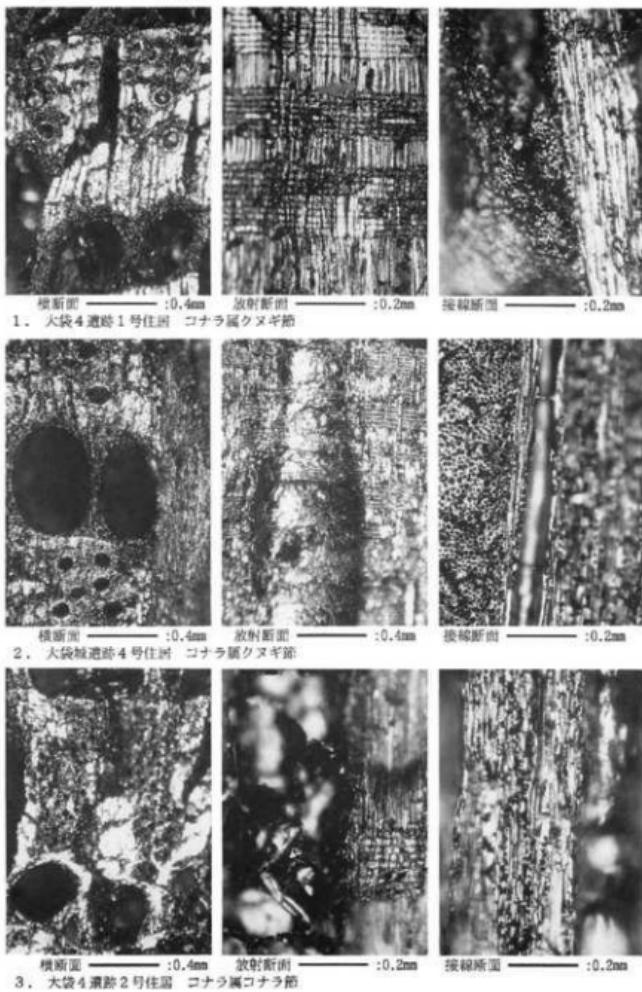


写真 119 炭化材顕微鏡写真

## 参考文献

館林市教育委員会	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 諸集
館林市教育委員会	茂林寺沼及び低地湿原調査報告書 第2集
館 林 市	館林市誌 歴史編
館 林 市	館林市誌 自然編
館林市立図書館	館林双書
群馬県教育委員会	群馬県の遺跡
群馬県教育委員会	群馬県の中世城館跡
群馬県林務部	群馬県の貴重な自然 地形・地質編
群馬県	群馬県史
(財) 群馬県埋蔵文化財 調査事業団	発掘調査報告書 諸集

抄 錄

ふりがな	おおふくろよんいせき	おおふくろじょういせき	はっくつちょうさほうこくしょ
書名	大袋4遺跡 大袋城遺跡 発掘調査報告書		
副書名	-		
巻次	-		
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ番号	27集		
編著者名	川島孝男		
編集機関	館林市教育委員会		
所在地	〒374 群馬県館林市城町1-1		
発行年月日	西暦1995年3月20日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおふくろよん 大袋4	館林市 くすのきちょうあざごしもしがら 楠町字下志柄	10207	73			19931220 19940217	1,650	県道改 良工事
おおふくろじょう 大袋城	館林市 はなやまちょうあざごおおふくろ 花山町字大袋	10207	69			19940210 19940321	1,290	県道改 良工事
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
大袋4	集落址	古墳ほか	堅穴住居址 掘立柱状遺構 溝	2軒 1基 16本	《住居址》 壺、折返口縁壺、甕、台付甕、 器台、石皿、鉢、土玉等 《溝》 石斧			
大袋城	集落址 城館址	古墳 中世～ 近世	堅穴住居址 土塙 堀溝	3軒 1本 1本 1本	《住居址》 折返口縁壺、甕、台付甕、器 台、鉢、手捏土器、土玉等 《塙、井戸》 碗、德利、燈火皿、猪口、片口、 内耳鍋、瓦、摺鉢等			

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集

大袋4遺跡

大袋城遺跡

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 田部井印刷有限会社

発行年月日 平成7年3月20日